多賀城市文化財調査報告書 第26集

山王遺跡

－第９次発掘調査報告書－

平成３年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

巻頭図版　　ＳＸ543土器埋納遺構出土青磁瓶（水注）

序　　文

山王遺跡は多賀城跡の南東に隣接する遺跡で、近年、古代多賀城の国府域に相当する地域として、その重要性が認識されつつあります。この国府域内にも市街地化の波が押し寄せ、宅地開発あるいは公共事業等の原因により、発掘調査が急増しております。

さて、今回共同住宅建設が計画された予定地は、以前より緑釉・灰釉陶器が多量に出土したところとして知られており、何かしら貴重な遺構が存在しているのではないかと考えられていました。このため建設工事に先立って発掘調査を実施してまいりました。

その結果、本書に示されているように、全国でも初めての国守の館と推定される遺構が発見され、古代多賀城に係る歴史の一端を解明することができました。また、本市では当遺跡の歴史的・学術的重要性から開発予定地を保存することとなり、現在国指定史跡の働き掛けを行っています。

最後になりましたが、本調査に御協力を賜わりました大倉建設株式会社、（株）かたくら建築工房、大豊建設株式会社、そして、調査および保存協議に際して種々有益なご指導をいただきました文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所の関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成３年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
所　長　斎藤一司

例　　言

1．本書は、共同住宅建設に先立って行った山王遺跡の発掘調査報告書（第９次調査）である。

2．本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、石川俊英・相沢清利が担当した。

3．本書中における各遺構の略号は次の通りである。

　ＳＢ－掘立柱建物跡、ＳＥ－井戸跡、ＳＤ－溝跡、ＳＫ－土坑、ＳＸ－その他

4．本書挿図中の水糸レベルは、標高値を示している。

5．調査区の実測基準線は、「平面直角座標系Ｘ」を使用し、方位の標示は座標北を用いた。

6．本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・佐原1976）を使用した。

7．須恵器の断面は総て黒ベタで表した。網スクリーントンは土師器の黒色処理を示している。

8．発掘調査及び報告書作成にあたり、狩野　久、斎藤孝正（文化庁）、矢部良明、伊藤嘉章（東京国立博物館）、平川　南、永嶋正春（国立歴史民俗博物館）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、荒川正明（出光美術館）、亀井明徳（専修大学）、桑原滋郎、白鳥良一、小井川和夫、阿部博志、後藤秀一、佐藤則之、菅原弘樹（宮城県教育庁文化財保護課）、藤沼邦彦、高野芳宏、吉沢幹夫（東北歴史資料館）、進藤秋輝、古川雅清、丹羽　茂、柳沢和明、村田晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）の諸氏に御教示、御協力いただいた。

9．木簡の保存処理に際しては、村山斌夫（雄勝町立大須中学校）、梅村聖一（東北歴史資料館）の両氏に御配慮いただき、松田隆嗣（福島県立博物館）氏に依頼して実施した。

10．木簡の解読にあたっては、平川　南（国立歴史民俗博物館）氏に依頼し寄稿していただいた。

11．調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

12．本調査の概要については、現地説明会資料等で一部公表しているが、本書と内容が異なる場合は、本書が優先するものである。

調　査　要　項

1．遺跡所在地：　宮城県多賀城市山王字千刈田５－７

2．調査期間：　平成２年４月16日～８月23日

3．調査面積：　740㎡

4．調査主体者：　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

5．調査担当者：　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　斎藤　一司　　主査　赤坂みゑ子

研究員　滝口　　卓　　石川　俊英　　千葉　孝弥　　石本　　敬

技　師　相沢　清利

6．調査協力：　文化庁、国立歴史民俗博物館、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、大倉建設株式会社、㈱かたくら建築工房、大豊建設株式会社、ＪＲ東日本

7．発掘調査参加者：　佐々木四郎　千葉　享一　鈴木　一郎　佐々木忠志　赤間かつ子　阿部　敏子　阿部美智子　阿部　米子　大山　貞子　菅野　恵子　熊谷きみ江　後藤　恵子　佐藤　容子　高野　敏子　角田　静子　渡辺　幹子

8．遺物整理参加者：　佐藤　悦子　熊谷　純子　黒田　啓子　笠松　奈穂　舘石真由美

本 文 目 次

序　文

例言・調査要項

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境……1

Ⅲ　調査方法と経過……3

Ⅳ　調査成果……4

1．基本層位と出土遺物……4

2．検出遺構と出土遺物……9

(1)　掘立柱建物跡……9

(2)　井　戸　跡……22

(3)　溝　　跡……22

(4)　特殊遺構……26

(5)　土　　坑……28

Ⅴ　考　　察……31

Ⅵ　多賀城市山王遺跡の木簡について（平川 南）……52

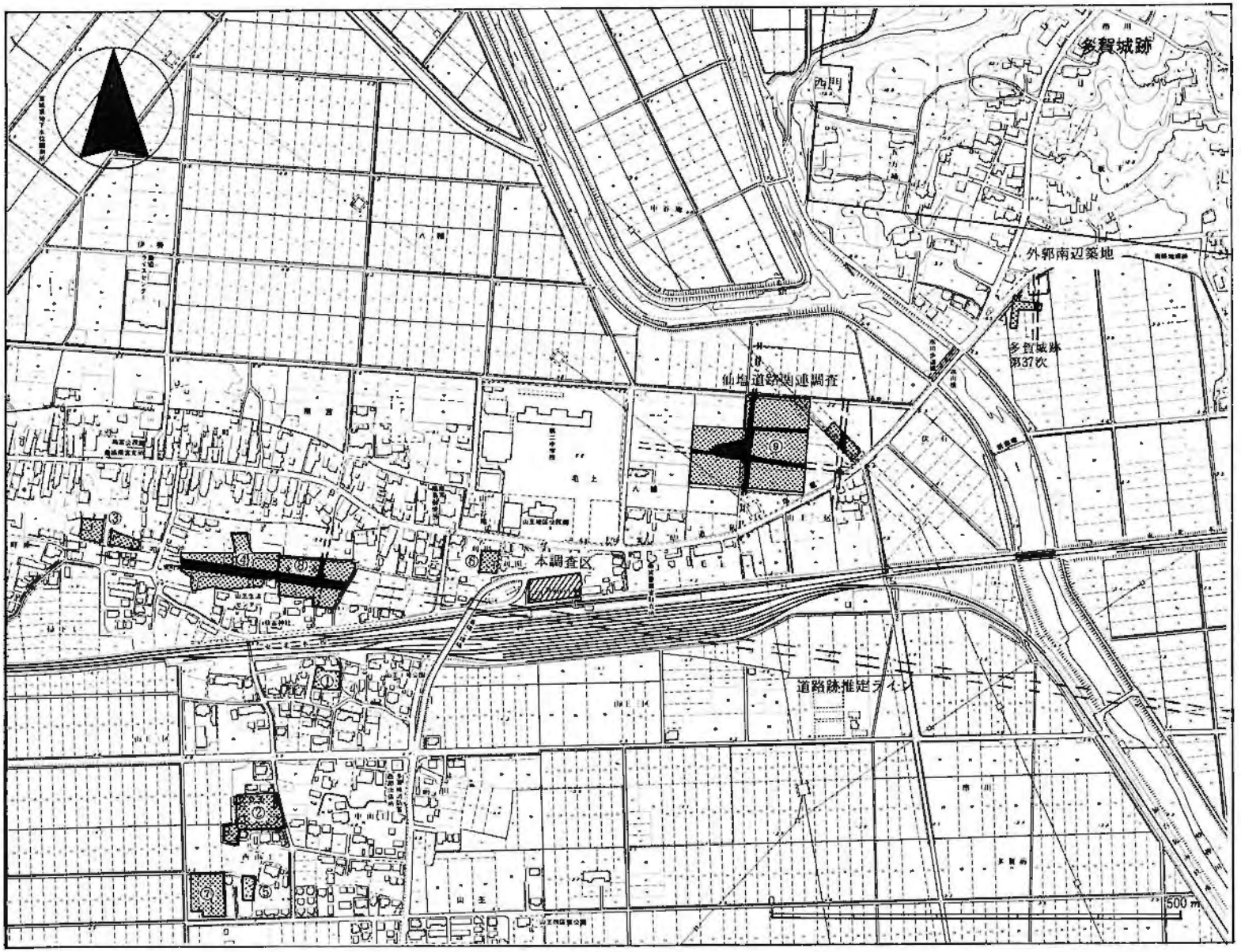
Ⅰ　調査に至る経緯

本調査については、平成元年3月に当該地を対象としたマンション建設工事が（株）かたくら建築工房より提示されたため、本件開発計画について検討を行った。当該地は山王遺跡の包蔵地内に位置し、近隣の調査においても古墳時代～江戸時代の遺構・遺物が検出されていることや、過去において隣接する山王駅周辺より緑釉・灰釉陶器が多量に発見されたという話も伝わっており、古代の遺構・遺物の存在が十分に考えられた。そこで、申請者と調査日程等の協議を行い、建設予定地の発掘調査について同意が得られたので、本調査を実施したものである。

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境

山王遺跡は、多賀城市山王・南宮の両地区を中心とする東西約2㎞、南北約1㎞の広範囲にわたる遺跡である。本調査地点は旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に立地しており、海抜約5ｍを計る。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。周辺の遺跡についてみると、本調査地点の北東約1.2㎞の丘陵上に特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南東地域には市川橋遺跡が所在しており、山王・新田・高崎遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

山王遺跡はこれまで9回調査が実施されており、古墳時代～近世までの遺構・遺物が多数検出されている。特記される調査成果としては、昭和58年に実施した第4次調査において幅12ｍの道路跡が発見され、道路近くの土坑から「観音寺」と墨書された土器が、宗教行事に使われた多量の土器とともに出土したこと。また昭和60年の第6次調査の千刈田地区から、5間×2間の掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、さらに昭和63年の第8次調査では、第4次調査で発見されていた幅12ｍの道路跡の延長が確認され、新たにこの道路から分岐する幅3ｍの南北道路もみつかった。さらに平成元年の仙塩道路関連に係る調査でも、多賀城に係る道路跡や掘立柱建物跡をはじめ、竪穴住居跡や畝状遺構などの古代の遺構が多数検出されたほか、堀を方形に巡らせた中世の屋敷跡も発見され、その変遷が把握された。これまでの調査地区からは当時高級品として扱われた灰釉陶器、緑釉陶器、青磁・白磁や、官衙遺跡から発見される硯、瓦、斎串木簡、漆紙文書なども出土しており、この一帯が古代多賀城との関連性が強い地域であることが判明している。



第1図　調査区位置図

Ⅲ　調査方法と経過

調査は、平成２年４月16日から重機による表土剝離より開始した。翌日には作業員を動員し調査区に沿って土層観察を兼ねた排水路を掘る。その結果、盛土（第Ⅰ層）、旧水田土（第Ⅱ層）古代の土器を多量に含む第Ⅲ層→第Ⅳ層→地山(第Ⅴ層)といった層序が得られた。４月20日から第Ⅲ層上面の遺構検出作業に入る。遺構は検出されず、遺物を多量に含んでいることから包含層と解釈された。第Ⅲ層を除去し、Ⅳ層上面の遺構検出作業に入る(５月16日)。22日には調査区内に実測図作成のための遣り方を設定する。この面からは建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、多量の土

番　号	年次・地区	調査期間	面　積	遺　構	遺　物
①	第１次 (中山王)	54.12.17 ～ 55. 3.22	1.500㎡	掘立柱建物跡 小柱穴、溝跡 土坑	土師器、須恵器、瓦、灰釉陶器、 紡錘車、土錘、鉄鏃、刀子、 石帯
②	第２次 (山王二区)	54.12.20 ～ 55. 1.28	1.000㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡	土師器、須恵器、瓦
③	第３次 (西町浦)	55. 6. 5 ～11.30	1.000㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡、 井戸跡、溝跡 小柱穴	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、緑釉陶器、砥石
④	第４次 (東町浦)	58.10. 3 ～ 59. 3.17	2.300㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡、 土坑、道路跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、瓦
⑤	第５次 (山王二区)	60. 5.27 ～ 7 5	400㎡	柱列跡、溝跡 井戸跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、木製品（曲物容器、 盤、斎串、箸状製品、串状製品）
●	第６次 (千刈田)	60.11.25 ～ 61. 2.14	378㎡	掘立柱建物跡 竪穴住居跡、 井戸跡、溝跡 小柱穴、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器、 土製カマド、円盤状土製品、瓦、 砥石、二面硯、円面硯、灰釉陶器、 木製品（曲物容器、折敷、盤）
⑦	第７次 (山王二区)	63. 5.24 ～ 7.26	770㎡	溝跡、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器
⑧	第８次 (東町浦)	63.11.14 ～ 1. 2. 4 1. 4. 7 ～ 7.22	2.750㎡	掘立柱建物跡 道路跡、溝跡 井戸跡、土坑	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、 瓦、硯、土製カマド、木製品 （斎串、曲物容器、漆器）、 植物遺体
⑨	仙塩バイパス関連調査	1. 6. 8 ～12.14	7.000㎡	掘立柱建物跡 道路跡、竪穴 住居跡、井戸 跡、甕棺墓	土師器、須恵器、赤焼き土器、 灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、鉄製品、 木簡、漆紙文書

第１表　山王遺跡調査一覧表

器を埋納した土器埋納遺構を検出した。これらの遺構群の中には埋土中に灰白色火山灰を含むものがあり、遺構を含めて第Ⅲ・Ⅳ層の年代を知る手掛りとなった。建物跡には埋土中に焼土ブロックを多量に含んだ廂付の建物の一部を検出した。更に、調査区中央部で検出した井戸跡は、大木を半截してくりぬき再度あわせた井戸側であることも判明した。第Ⅳ層上面で検出したこれらの遺構は、6月中旬頃には平面図・セクション図の作成及び写真撮影を完了した。第Ⅳ層除去後、20日から地山上面の遺構検出作業に入る。同日井戸側の取り上げも行う。地山上面からも上層同様に建物跡、土坑、井戸跡、溝跡等を検出した。一方上層で検出した廂付建物跡については、全体の様相が不明確であり、拡張して全容把握に努めた。この結果、西側にも廂が取り付くことが判明し、おおむね四面に廂付の大規模な建物跡であることが予想された。7月24日には本建物跡の南側柱列の断ち割りを行い、南西コーナーの柱穴より木簡が出土した。翌日、東北歴史資料館で木簡が題籤軸と判明する。26日、木簡を国立歴史民俗博物館平川南氏に送り判読を依頼する。27日には県文化財保護課の視察があり、本建物跡の全容をつかむためさらに拡張するよう指導を受ける。30日、申請者と協議を行い建物部分のみの拡張を行う。拡張の結果、建物跡は北・東側にも廂が取り付き、東西8間、南北4間の東西棟四面廂付建物であることが判明した。このような建物跡の存在、さらに木簡の釈文等から本建物跡は、国守の館の中心施設である可能性が高まった。8月16日、文化庁の視察があり、保存についての協議を行う。現地調査については8月23日をもって完了し、10月6日に現地説明会を開催した。この後の整理期間中に四面廂付建物跡について再検討を要する事実が判明し、10月25日から11月8日にかけて補足調査を実施した。その結果建物跡については、4時期の変遷が判明し、規模も東西9間以上南北4間の東西棟四面廂付建物跡と理解された。

Ⅳ 調 査 成 果

1．基本層位と出土遺物

基本層位はⅠ～Ⅴ層までに分層された。

Ⅰ層：　現代の盛土層　層厚30～50cm。

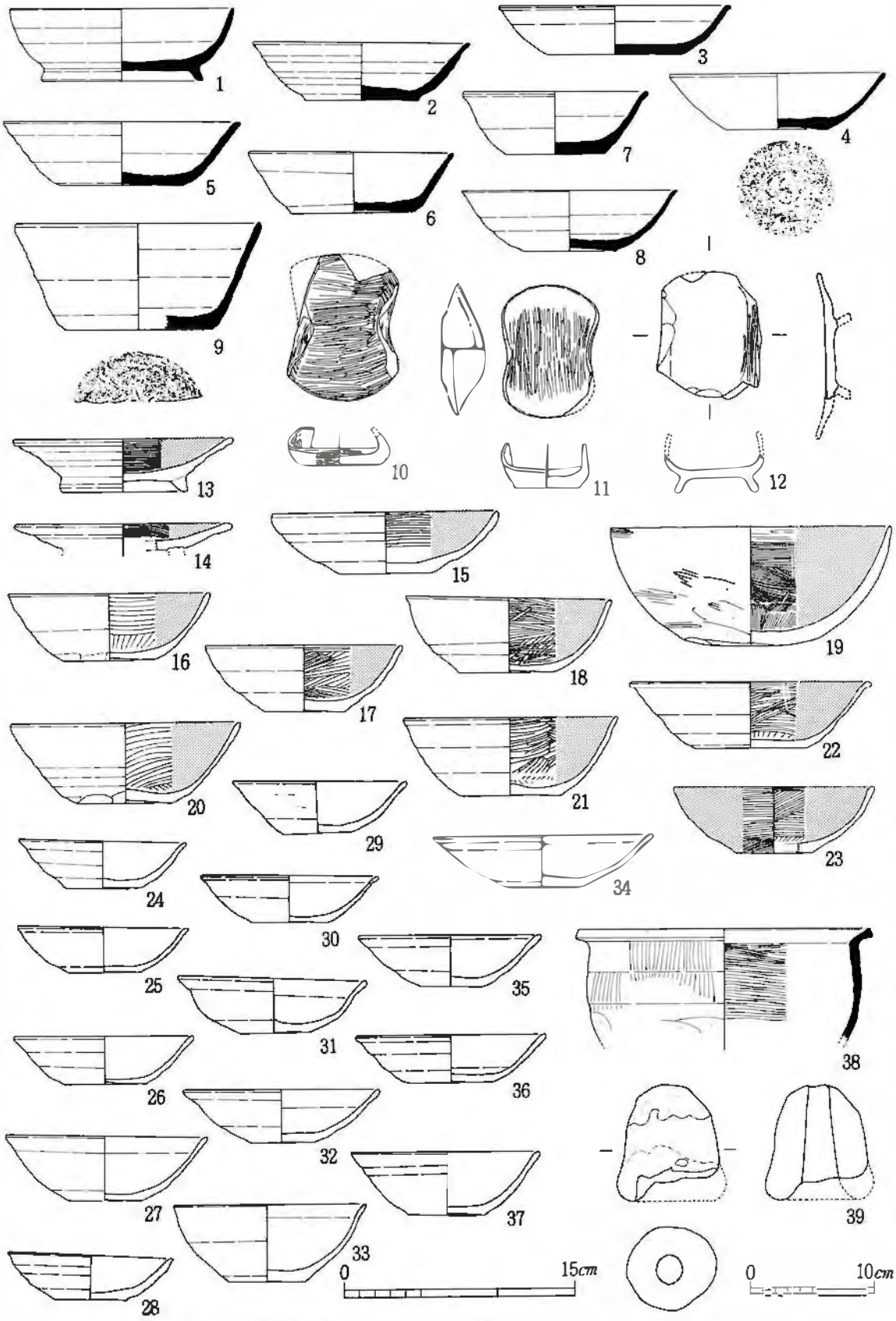
Ⅱ層：　現代の水田耕作土　層厚20cm前後。

Ⅲ層：　10ＹＲ5/1褐灰色シルト層　細片化した土器片と木炭粒を多量に混入する。層厚10～20cm。

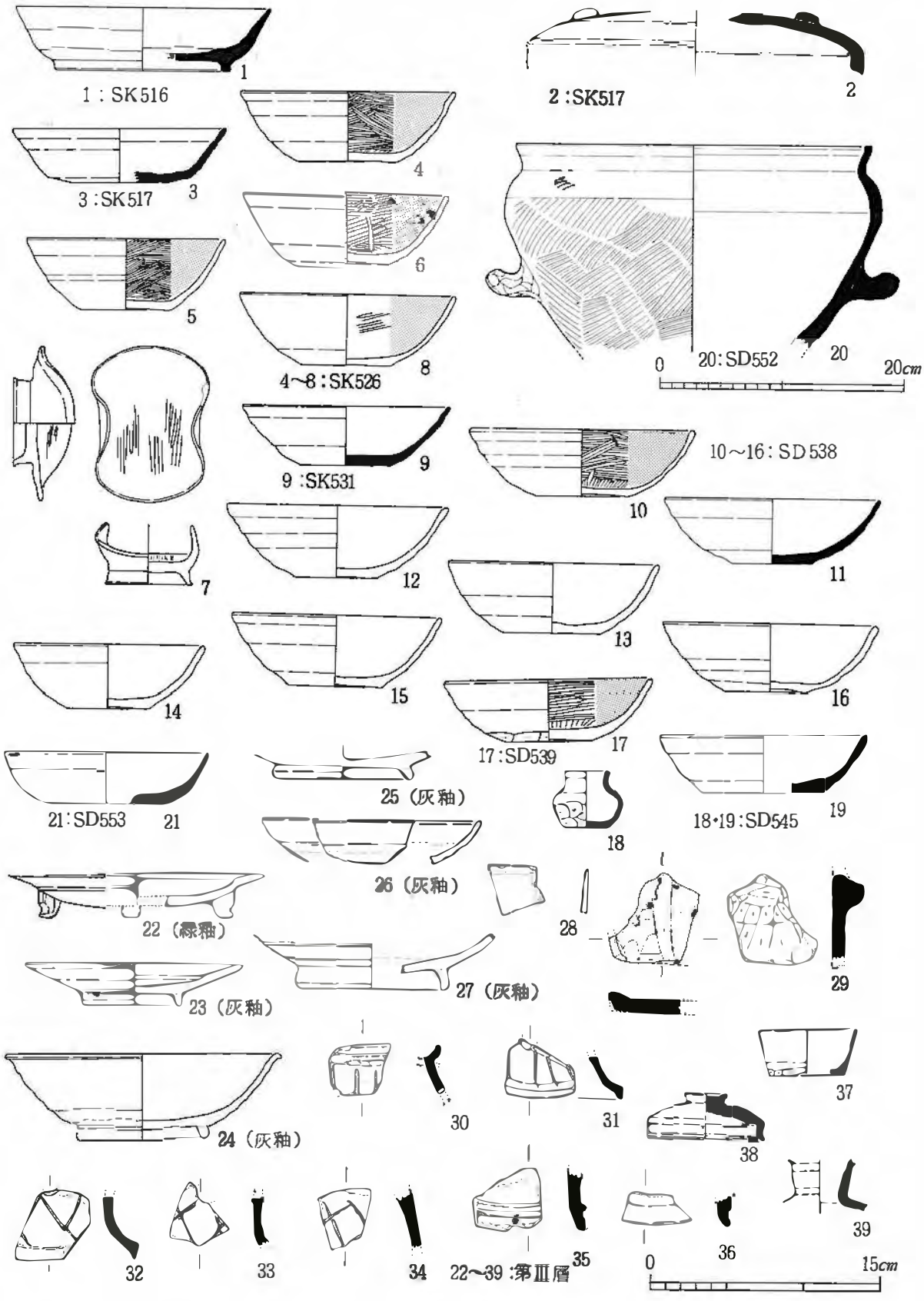
Ⅳ層：　10ＹＲ5/1褐灰色シルト層　土器片、焼土粒、木炭粒を含みかたくしまっている。（整地層）層厚10～20cm。

Ⅴ層：　5Ｙ淡黄色砂質シルト（無遺物層・地山）

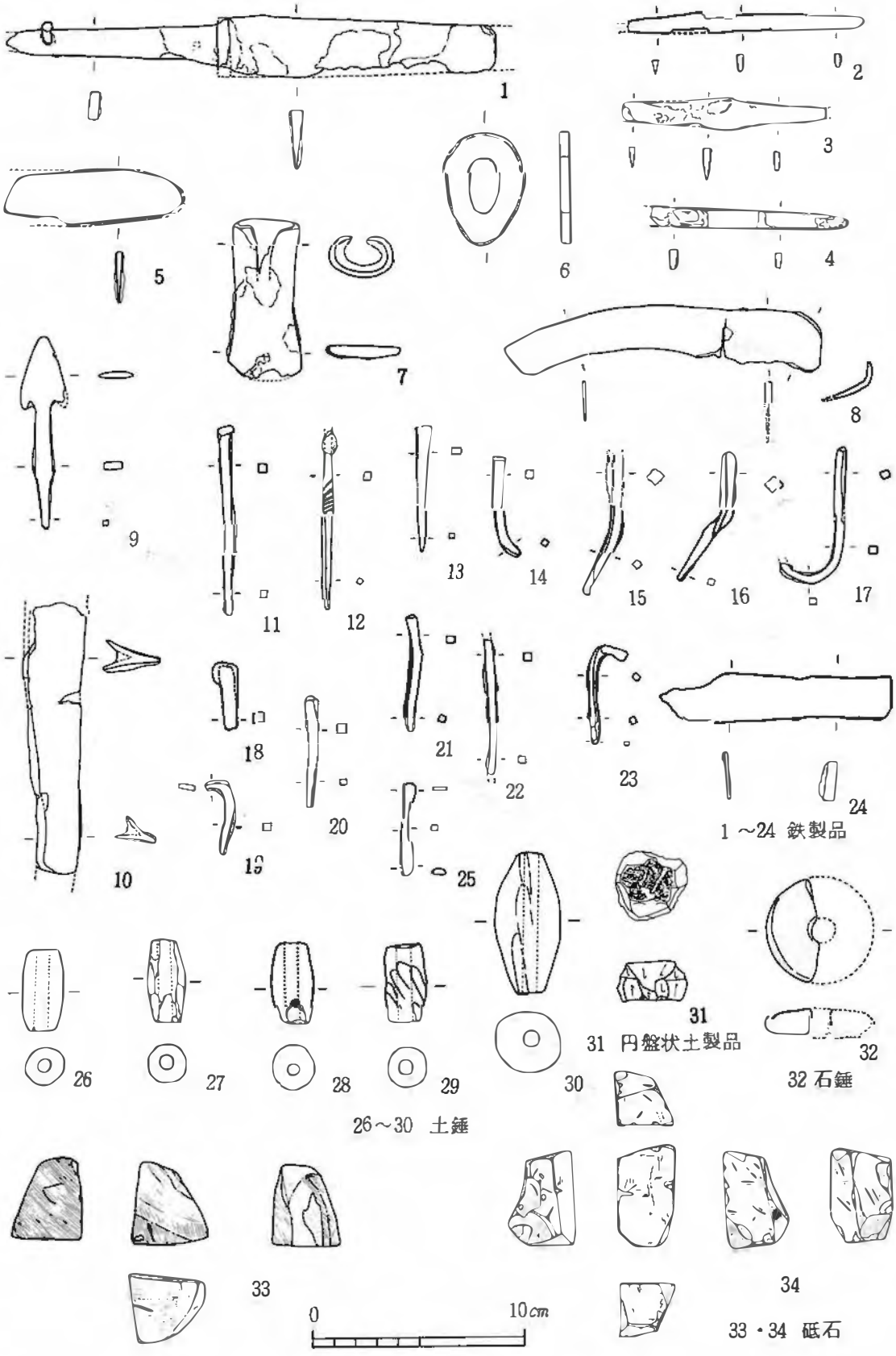
Ⅲ層が平安時代の遺物包含層、Ⅳ層が同じく平安時代の整地層で遺構検出面となっている。



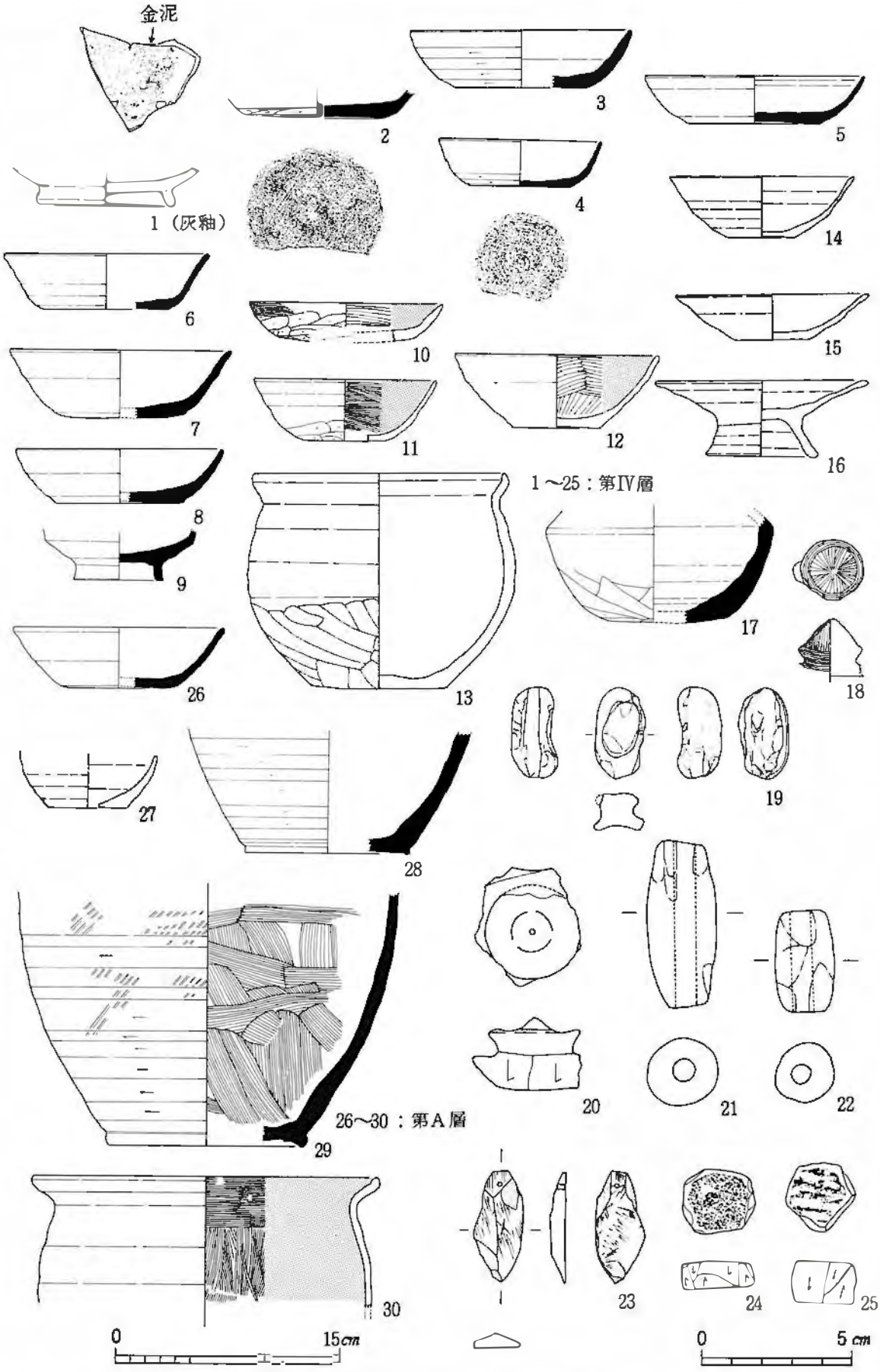
第2図　第Ⅲ層出土遺物実測図



第3図　第Ⅲ層他出土遺物実測図



第４図　第Ⅲ層出土遺物実測図



第５図　第Ⅳ層・Ａ層出土遺物実測図

また、調査区内では部分的に削平を受けている箇所があり、Ⅴ層上面（地山面）で検出される遺構のうちⅣ層との関係が不明なものもある。Ⅴ層より下層では遺構・遺物とも検出されていない。

遺物はⅢ層とⅣ層から出土しているが、とりわけⅢ層からの出土遺物が多数を占める。しかし、出土土器については後述するように明らかに時期の異なるものが混在していることから2次期的な堆積層の可能性が高いといえる。以下層ごとに出土遺物の概要を記述していく。

第Ⅲ層からは、土師器杯・高台付杯・耳皿、須恵器杯・高台付杯・甕・蓋、赤焼き土器杯、灰釉陶器椀・段皿、緑釉陶器椀・段皿・三足盤、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、円面硯・風字硯、土製品｛土錘・羽口・円盤状土製品（須恵器甕の破片を転用）｝、石製品（砥石・石錘）、鉄製品（鉄刀・鏃・刀子・鋤・鎌・鉄斧・鉄鏃）が出土している(第2図1～39、3図22～39、4図1～34)。

第Ⅳ層からは、土師器杯・蓋・甕、須恵器杯・壺、赤焼き土器杯・高台付杯、土製品（土錘・円盤状土製品）、石製品（石製模造品・剣形）が出土している（第5図26～30）。

2．検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物跡

ＳＢ474： 調査区北東部拡張区のⅣ層上面で検出された桁行9間以上、梁行4間の東西棟掘立柱建物跡である。本建物跡は、南、北、西側に廂が取り付くが、東側についてはその規模・形態より廂が取り付く可能性がきわめて高い。

ＳＢ475・491建物跡、ＳＫ512土坑と重複しており、ＳＫ512土坑より新しく、ＳＢ475・491建物跡より古い。建物は同位置内で四時期の変遷があり、身舎部分には床束及び間仕切りと思われるものが認められる。柱穴は身舎部分では、方形もしくは不整形を呈している。廂部分も身舎部分と同様の形状を呈するものであるが、全体に規模が小さくなっている。以下古い順に説明を加える。

ＳＢ474（Ａ） 北側身舎部分が比較的残りが良く、わずかではあるが状況を知ることができた。柱穴は、北側柱列の西から2間目を参考にすると、一辺約0.9ｍの方形状を呈するものである。埋土は、黒褐色土に地山ブロックを含むものである。

ＳＢ474（Ｂ） 北側身舎部分の柱列西から5間目を参考にすると、柱穴は、Ａ期同様一辺約0.9ｍの方形状を呈する。埋土は、Ａ期と同様ではあるが、層中に焼土ブロック、炭などが含まれる。

ＳＢ474（Ｃ） 柱穴の形状、規模について見るとＡ・Ｂ期が方形を基調とするのに対し、本期の多くは不整形を呈するようになり、規模も若干小さくなる傾向が見られる。柱間は、柱痕跡が検出されていないものが多くあるため不明となっている。柱は確認された柱痕跡より径約

0.2 m前後の円形を呈している。埋土は、黒褐色土中に灰白色火山灰粒子、焼土ブロック、炭化物、土器片が多量に含まれる。このことから前期のB期は、火災のため焼失したものと思われる。なお、B・C期柱穴の一部には礎板が検出された。

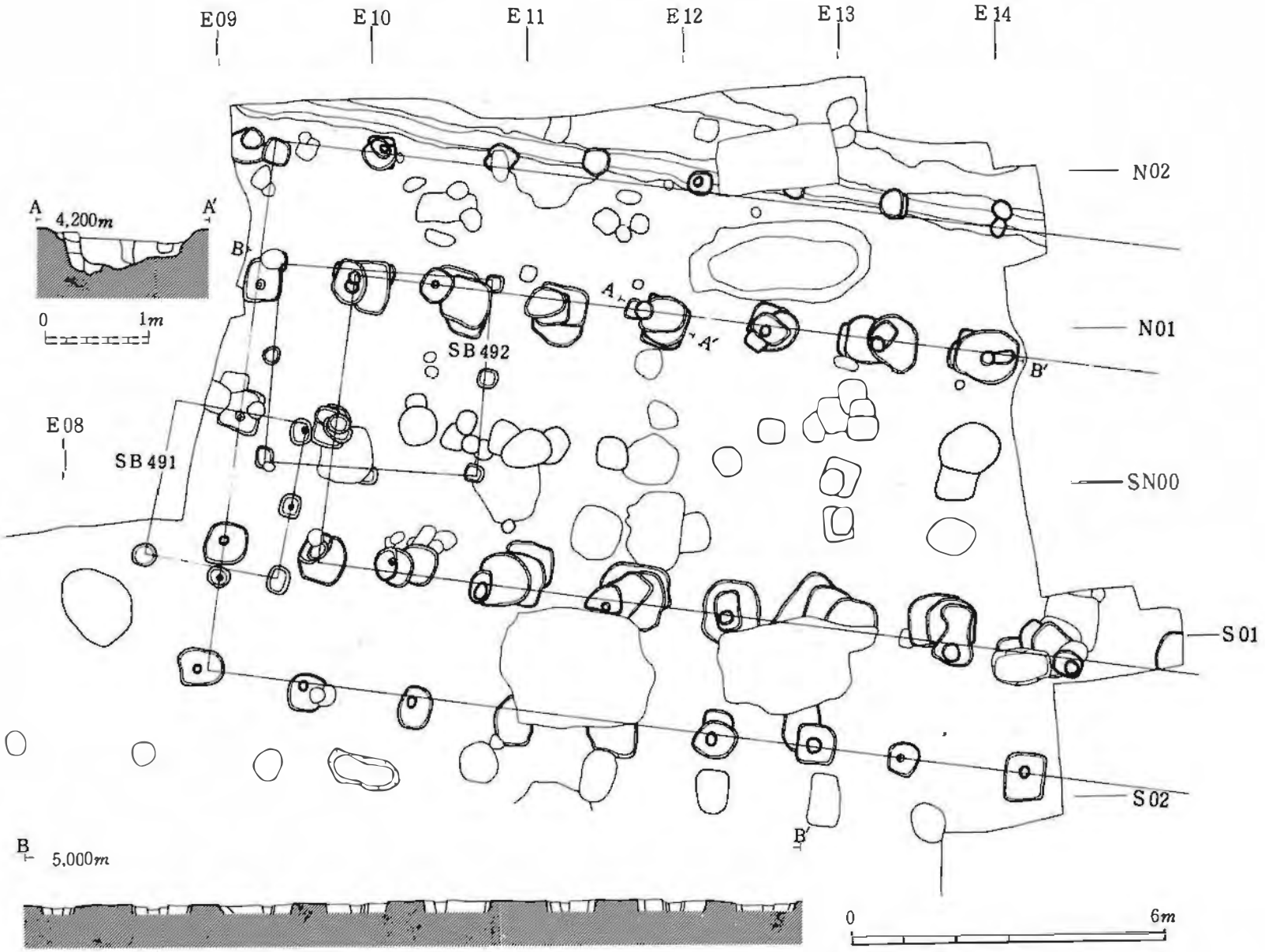
SB474（D） 柱穴は、C期と比較して形状が不整形となりさらに規模も小さくなる。建物跡の方向は、身舎北側柱列の1間目から、7間目で見ると北で8度7分西に偏している。桁行柱間は身舎部分の北側柱列西より1.54m・2.35m・1.65m・2.34m・2.13m・2.09mで 総長12.10mまで検出した。西妻では北より2.86m・2.19mで総長5.05mを計る。廂部分について見ると南側柱列西より、2.12m・1.52m・3間分で6.36m・1.99m・2.09m・1.97mで 総長約16.05mまで検出した。西妻では北より2.63・2.54・2.41m・2.53mで総長10.11mである。柱は確認された柱痕跡より身舎部分では径0.15～0.25m、廂部分では径0.15～0.18mである。埋土はC期とほぼ同様である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・瓶・長頸瓶、赤焼き土器杯・高台付杯・皿、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、褐釉陶器水注、軒丸瓦、鉄製品（刀子・鎌）、石製品（砥石）が出土している。

SB475： 調査区南東部のⅣ層上面で検出された桁行5間以上、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。SB474建物跡、SK499、501、502土坑と重複しており、これらより新しい。建物跡の方向は、北側柱列のうち柱痕跡を確認している1間目と3間目で見ると東で7度06分南に偏している。桁行柱間は、北側柱列の西より2.37m・2.24m・（2間分で）4.27m総長8.88mまで検出した。梁行柱間は、西妻で北より3.71mである。柱穴は方形または円形を呈するもので一様ではない。埋土は褐灰色土中に灰白色火山灰を含んでいる。柱は柱痕跡より径約0.2～0.3 m前後の円形を呈する。遺物は土師器杯・甕・高台付杯、須恵器杯・甕・長頸瓶・蓋、赤焼き土器杯、緑釉陶器皿、軒丸瓦、円盤状土製品、石製品(砥石)、鉄製品(刀子)が出土している。

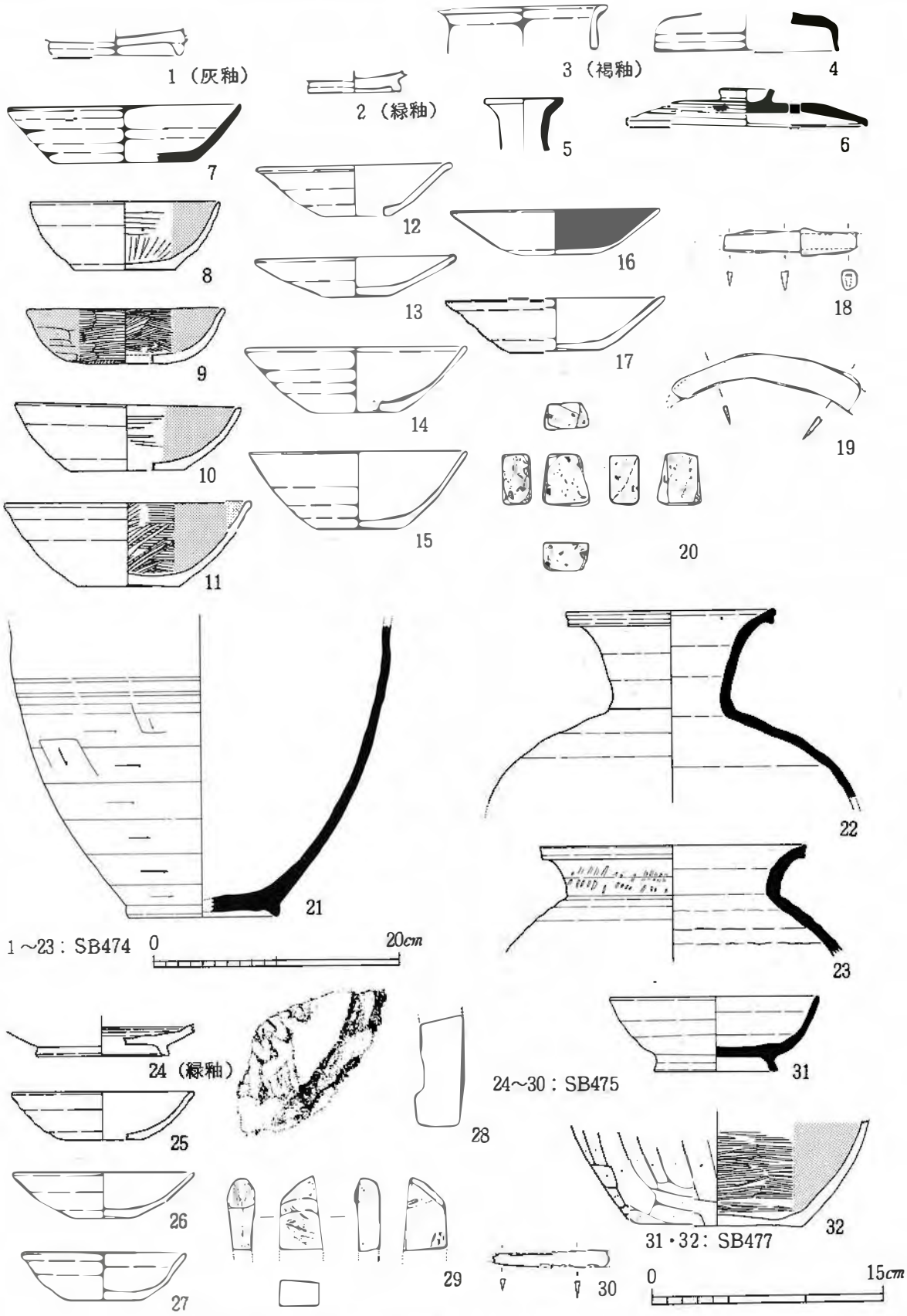
SB476： 調査区南東部の地山上面でSB475とほぼ同位置で検出された桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。建物の方向は南側柱列の円柱痕跡を確認している1間目から3間目で見ると東で7度26分南に偏している。桁行柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると北側柱列では西より1.73m、2間分で約3.53m総長約5.26mである。南側柱列では東より1.62m・2.10m・1.43mで総長約5.15mである。梁行柱間は西妻で北より1.71m、約1.87mで総長約3.58m、東妻では2間分で総長約3.69mを計る。柱穴は方形または円形を呈し、埋土はにぶい黄褐色土である。柱は柱痕跡より径約0.2 m 前後の円形を呈している。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

N
Y = + 12,987
Y = + 12,996
Y = +13,005
Y = + 13,014
Y = + 13,023
X = − 189,039
X = − 189,048
N02
N01
SN00
S01
S02
S03
S04
SD536
SB492
SK529
SD535
SB474
SB491
SB477
SB480
SB484
SK530
SK527
SK522
SK496
SK500
SK503
SK515
SK526
Ⅲ・Ⅳ層
SB485
SK513
SX544
SB487
SD539
SK516
SK493
SK506
SD541
SK524
SE504
SK508
SK518
SB488
SX543
SK512
SK511
SB489
SK517
SK499
SB476
SD538
SK495
SK494
SK505
SK509
SK502
SK501
SK528
SB475
A層
SD553
SD552
SK523
SE510
SK519
SK498
SK532
SK521
SK525
SK520
SK514
SK546
SB481
SK497
SK531
SD534
SK507
SD537
SB478
SB483
SB490
SB486
SB479
SB482
E01
E02
E03
E04
E05
E06
E07
E08
E09
E10
E11
E12
E13
※ アミはSD545小溝群
0
5m

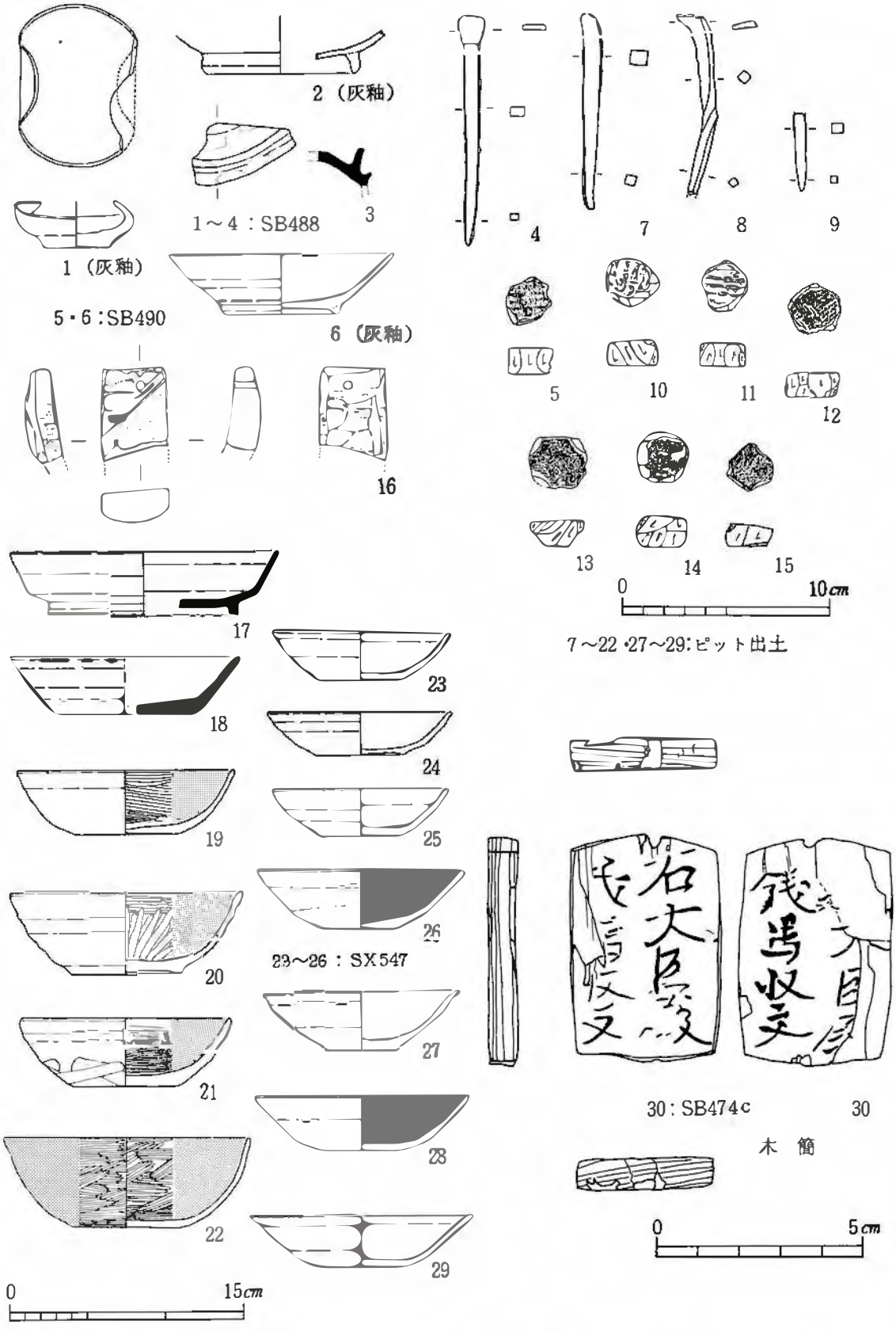
第6図　検出遺構全体図



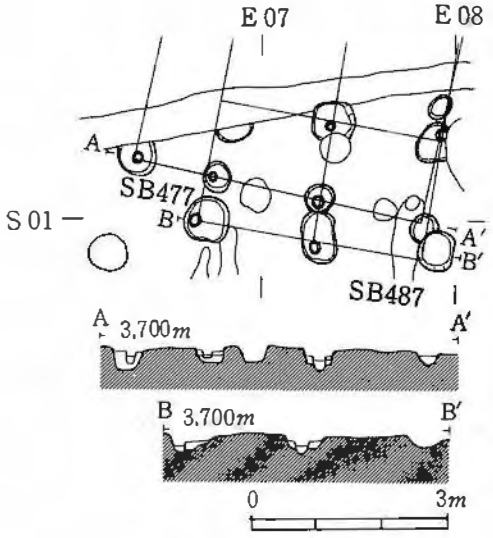
第7図　SB474・491・492実測図



第８図　掘立柱建物跡出土遺物実測図

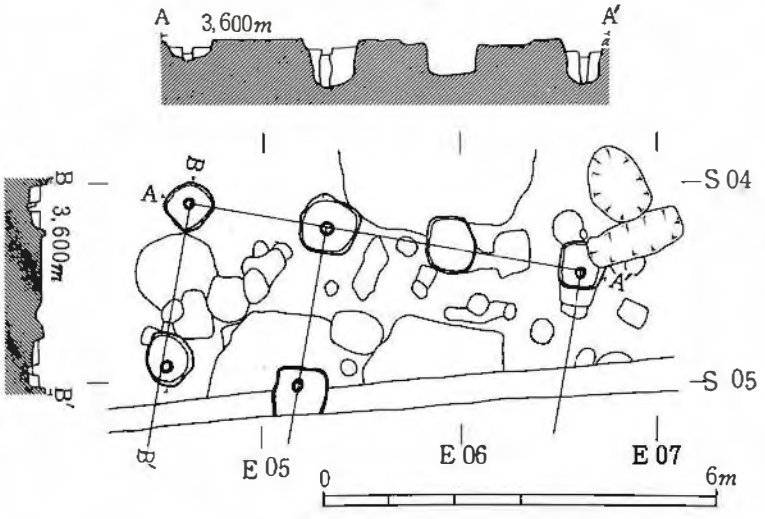


第９図　掘立柱建物跡他出土遺物実測図



第10図　ＳＢ477･487 実測図

ＳＢ477：　調査区中央部北側の地山上面で検出された桁行3間、梁行１間以上の東西棟掘立柱建物跡である。建物跡の方向は、南側柱列の円柱痕跡を確認している南西偶より２間目で見ると東で13度02分南に偏している。桁行柱間は柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると、南側柱列の西より約1.17m、約1.17m、約1.64mで総長約3.98mである。柱穴は円形を呈し、埋土は灰黄色土で砂を主体とするものである。柱は柱痕跡より径約0.2m前後の円形である。遺物は土師器杯・甕、須恵器高台付杯が出土している。

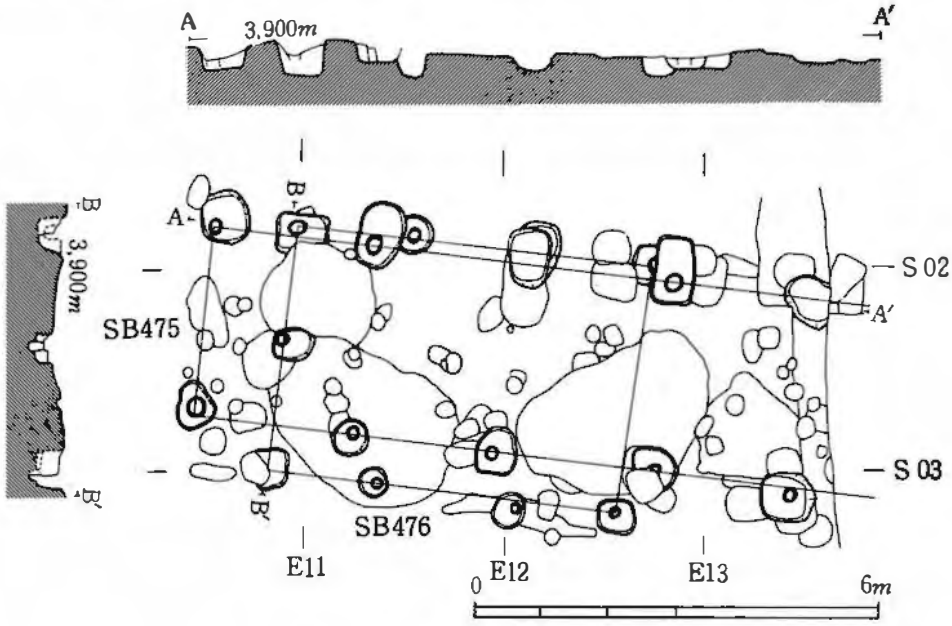


第11図　ＳＢ478 実測図

ＳＢ478：　調査区南西部の地山上面で検出した。桁行３間、梁行１間以上の西廂付建物跡である。ＳＢ479建物跡、ＳＫ520、521、525土坑、ＳＥ510井戸跡と重複があり、ＳＫ525土坑より古く、ＳＥ510の井戸跡より新しい。ＳＢ479建物跡、ＳＥ420、521とは直接切り合いがなく、新旧関係は不明である。建物跡の方向は、北側柱列の円柱痕跡を確認している。北西偶より３間目で見ると、東で10度04分南に偏している。柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると、北側柱列の西より2.13m、1.97m、約1.94mで総長約6.04mである。身舎部分の柱穴は方形呈するのに対し、廂部分の柱穴は円形または方形であり規模も若干小さくなっている。埋土は、黒褐色土に地山ブロックを含んでいる。柱は確認された柱痕跡より身舎部分で径約０.２ｍ、廂部分で径0.15～0.18ｍを計る。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＢ479：　調査区南西部の地山上面で検出された桁行３間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ478、480、486建物跡、ＳＫ505・507・521・523土坑と重複し、ＳＢ486建物跡、ＳＫ521・523土坑より新しく、ＳＫ505土坑より古い。ＳＢ478・480建物跡、ＳＫ507土坑については直接切り合いがなく、新旧関係は不明である。建物跡の方向は、西側柱列の北西

偶から2間目で見ると北で5度51分東に偏し、北側柱列の北西偶から2間目で見ると東で6度01分南に偏している。桁行柱間は西側柱列の北より2.01m・2.39mで総長4.40mまで検出した。梁行柱間は、北側柱列の西より1.79m・1.91mで総長3.70mを計る。柱穴は方形状を呈してい



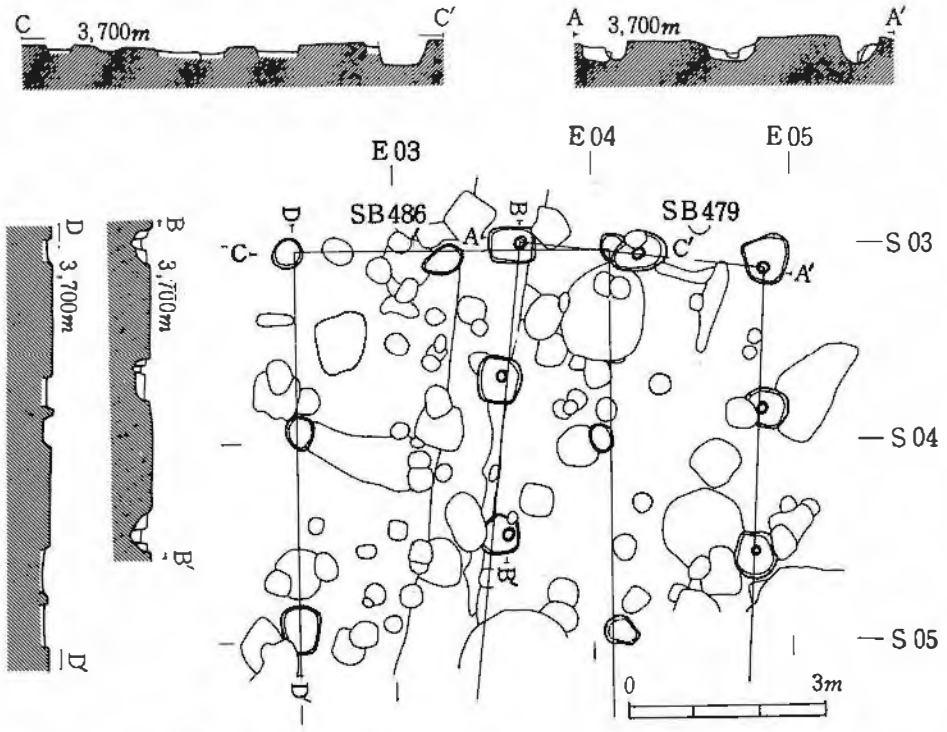
第12図　SB 475・476 実測図

る。埋土は黒褐色土に地山ブロック、酸化鉄を含むものである。柱は柱痕跡より径約0.2m前後の円形である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土している。

SB480：　調査区西側のⅣ層上面で検出された桁行4間以上、梁行2間南北棟掘立柱建物跡である。SB485、486建物跡、SK506、513、524、527、530土坑、SX544特殊遺構、SD533溝跡と重複し、SB485建物跡、SK513土坑より新しい。他の遺構群については直接切り合いがなく新旧関係は不明である。また、建物跡の方向、柱間についても柱抜き取り穴及び柱痕跡を検出していないため不明である。柱穴は方形を呈し、埋土は黒褐色土に地山ブロック、炭化物を含む。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶が出土している。

SB481：　調査区南東偶の地山上面で検出した桁行1間以上、梁行1間以上の掘立柱建物跡である。SB482建物跡と重複しており、これより新しい。柱穴は方形を呈し、埋土は黒褐色土に地山ブロックを含むものである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶が出土している。

SB482：　調査区南東偶の地山上面で検出した桁行3間、梁行2間以上の東西棟掘立柱建物跡である。SB481建物跡と重複しており、これより古い。建物跡の方向は、柱痕跡を検出している北側柱列の北西偶から3間目で見ると東で3度31分南に偏している。桁行柱間も同柱列で見ると西より1.68m、1.91m、1.93mで総長5.52mである。柱穴は方形を呈し、埋土は灰



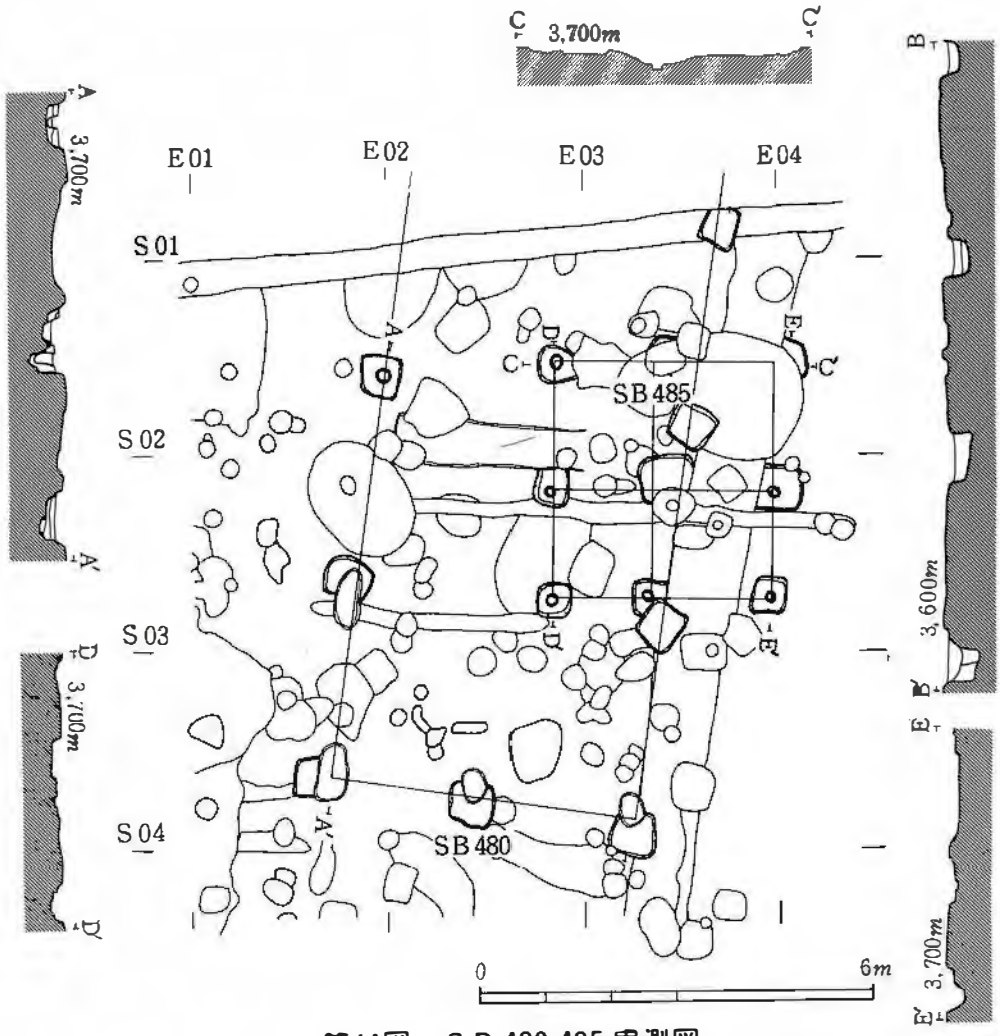
第13図　ＳＢ 479･486 実測図

白色土である。柱は柱痕跡より径約0.2 m前後の円形を呈している遺物は土師器杯・甕、 須恵器杯・甕が出土している。

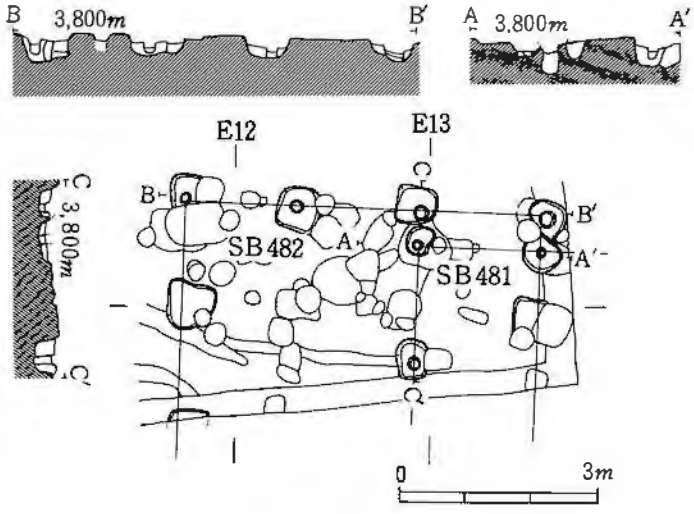
ＳＢ483:　調査区中央部南側地山上面で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物物跡である。柱穴の大部分が柱抜き取り穴のため方向、柱間等は不明である。ＳＢ488・489建物跡と重複し、後者より古く、前者とは直接切り合いがなく、新旧関係は不明である。柱穴は方形を呈し、埋土は灰黄褐色土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

ＳＢ484：　調査区北西部の地山上面で検出した桁行３間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。建物跡の方向は、ほぼ発掘基準線に沿っている。ＳＸ 54特殊遺構と重複しているが、直接切り合いがなく新旧関係は不明である。柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると、南側柱列西より２間分総長約2.39m 、西側柱列南より２間分で総長約2.66m まで検出した。柱穴は方形もしくは円形を呈するものである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器高台付杯・甕・瓶が出土している。

ＳＢ485：　調査区北西部の地山上面で検出した桁行２間、梁行２間の総柱建物跡である。ＳＤ534 溝跡と重複し、これらより古い。建物跡の方向は、ほぼ発掘基準線に沿っている。柱間は、北側柱列の西より1.66m ・1.93m で総長3.59m 、西側柱列の北より1.97m ・1.64m で総



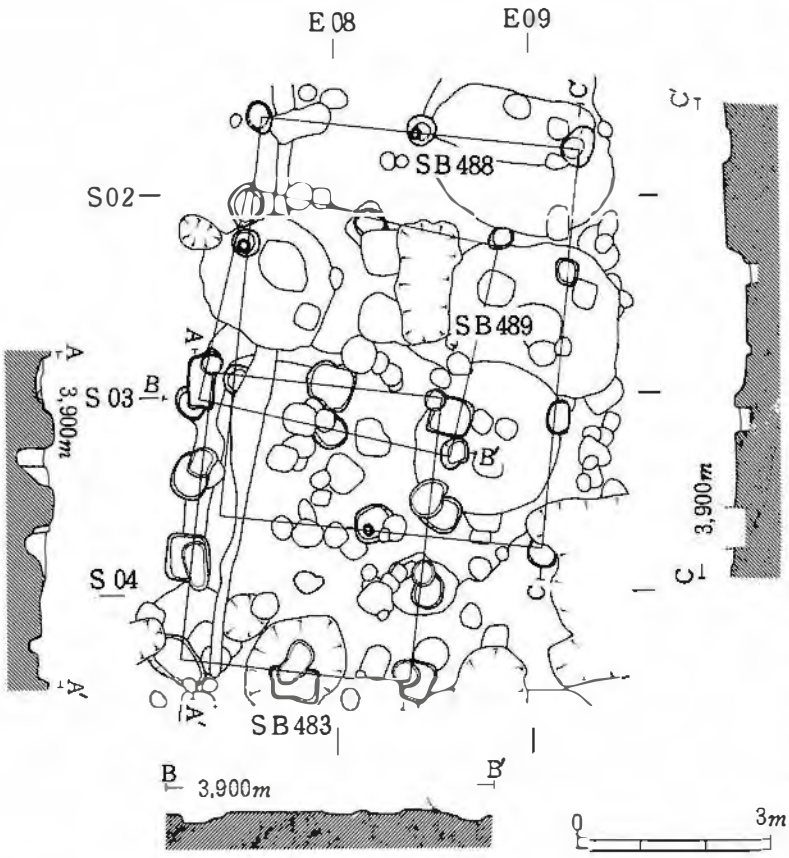
第14図　ＳＢ 480•485 実測図



第15図　ＳＢ 481•482 実測図

長3.61m、東側柱列北より1.96m・1.93mで総長3.89m、南側柱列西より1.43m・1.86mで総長3.29mである。柱穴は方形を呈し、柱は柱痕跡より径約0.2m前後の円形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

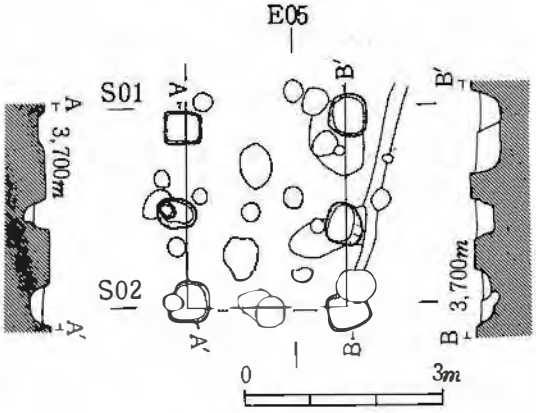
ＳＢ486：　調査区西側の地山上面で検出された桁行２間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建



第16図　ＳＢ483･488･489 実測図

物跡である。ＳＢ479・480建物跡、ＳＫ505・507土坑ＳＤ534 溝跡と重複し、ＳＢ479 建物跡より古い。

他の遺構については、直接切り合いがなく新旧関係は不明である。建物の方向はほぼ発掘基準線に沿っている。柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると、北妻では東より総長約4.99m を計る。西側桁行柱間は２間分で総長約5.13m まで検出している。柱穴は円形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。



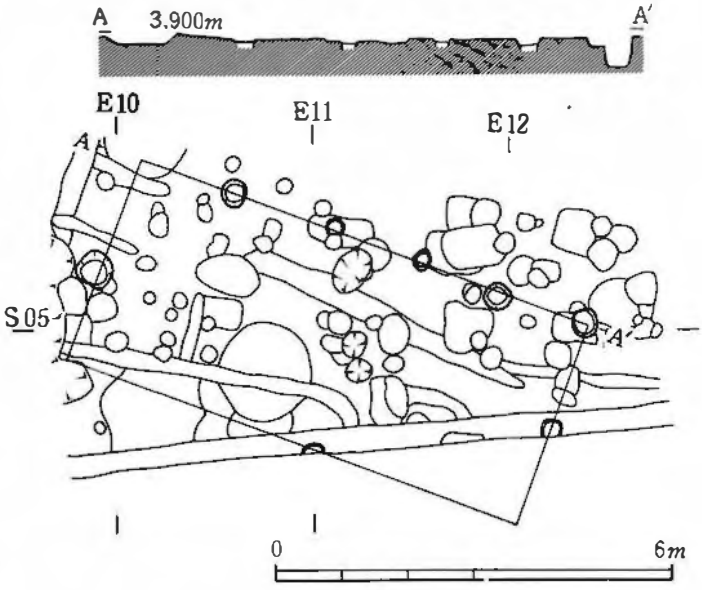
第17図　ＳＢ484 実測図

ＳＢ487：　調査区中央部北側の地山上面で検出した桁行２間総長約3.78m、梁行１間以上約1.58m の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ 477建物跡と重複し、これより新しい柱穴は円形もしくは方形を呈する。埋土は暗褐色土で地山ブロック、焼土粒子を含んでいる。柱痕跡は径約０.２m 前後の円形である。遺物は出土していない。

ＳＢ488：　調査区中央部のⅣ層上面で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ483・489建物跡、ＳＫ494・495土坑と重複し、ＳＫ494・495土坑より古い。ＳＢ483・489建物跡については直接切り合いがなく新旧関係は不明である。建物跡の方向及び柱間寸法も全て抜き取り穴のため不明である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、灰釉陶器椀・耳皿、円面硯、鉄製品(釘)が出

土している。

ＳＢ489：　調査区中央部の地山上面で検出した桁行２間、梁行１間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ483建物跡、ＳＫ517土坑と重複し、前者より新しいが、後者については直接切り合いがなく、新旧関係は不明である。建物跡の方向については、柱痕跡を検出していないため不明である。桁行柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴をその中心に想定すると、北側柱列の西より約1.89m・約2.04m、総長約3.93mで梁行柱間は東側柱列より約3.19mを計る。柱穴は円形を呈する。遺物は土師器甕、須恵器杯が出土している。



第18図　ＳＢ490 実測図

ＳＢ490：　調査区南東部の地山上面で検出した桁行５間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ482 建物跡と重複しているが、直接切り合いがないため新旧関係は不明である。柱痕跡は円形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・広口瓶、灰釉陶器椀、円盤状土製品が出土している。

ＳＢ491：　調査区北東部のⅣ層上面で検出した桁行約2.86m（２間分）、梁行約2.68m（２間分）の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ474建物跡と重複し、これより新しい。建物跡の方向は、柱痕跡を確認していないものもあり不明である。柱穴は円形を呈する。柱痕跡は径約0.18mの円形である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵器甕、赤焼き土器杯が出土している。

ＳＢ492：　調査区北東部の地山上面で検出した桁行約4.09m（２間分）、梁行約3.72mの東西棟掘立柱建物跡である。建物跡の方向は、柱痕跡を確認していないものもあり不明である。柱穴は円形を呈する。柱痕跡は径約0.15mの円形である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

(2) 井戸跡

SE504：　調査区のほぼ中央Ⅳ層上面で検出した。大木を半截したものをくりぬいてそれを合せた井戸側を持つ構造である。掘り方は隅丸方形を呈し、一辺約2m、深さ2.8mを計る。　井戸側（第19図Ⓐ～Ⓑ）は南側のAが全長135cm、最大幅85cm、最大厚8cm、北側のBが全長162cm、最大幅84cm、最大厚8cmを計る。両井戸側の両端には2ないし3ケ所に方孔が穿たれており、一部は、樺皮が残存している。工具痕は幅10cmほどで、内側に比較的明瞭に認められる。樹種はA・Bともにヒノキ科ネズコ属である。井戸底には水溜め等の施設は検出されなかった。井戸内埋土は5層まで分層された。しかし井戸側内については、半截して掘り下げることが不可能であったため不明なところがある。2・3層には灰白色火山灰が多量に入っている。出土遺物は井戸側内埋土中のものがほとんどで、特に木製品が井戸底付近から多量に出土した。土師器杯・甕・ミニチュア壺、須恵器杯・瓶、土錘、鉄製品（刀子）、木製品（斎串、櫛、立体人形、下駄、椀、弓）がある（第20・21図）。

SE510：　調査区のほぼ中央SE504の南側に隣接し、地山上面で検出した。重複関係からSB478、SK509より古い。方形の木組の井戸側を有していたと思われる。掘り方は隅丸方形を呈し、長軸3m、短軸2.5m、深さ1.65mを計る。井戸底付近で立杭2本とそれに組む板材を検出した。板材については原位置をとどめていなかった。土層観察によると、井戸底面から約70cmのところまでに、掘り方埋土と井戸側内埋土を区別する立ち上がりのラインが認められた。井戸内埋土は9層に分層された。1～6層までが地山ブロックを多く含む人為的な埋戻し土である。8層が掘り方埋土、7層が井戸側内埋土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯（回転糸切りのものとヘラ切りのものとがあり、回転糸切りのものは再調整を加えたものが多い。）高台杯・蓋、木製品（筒形）が出土している（第22図）。

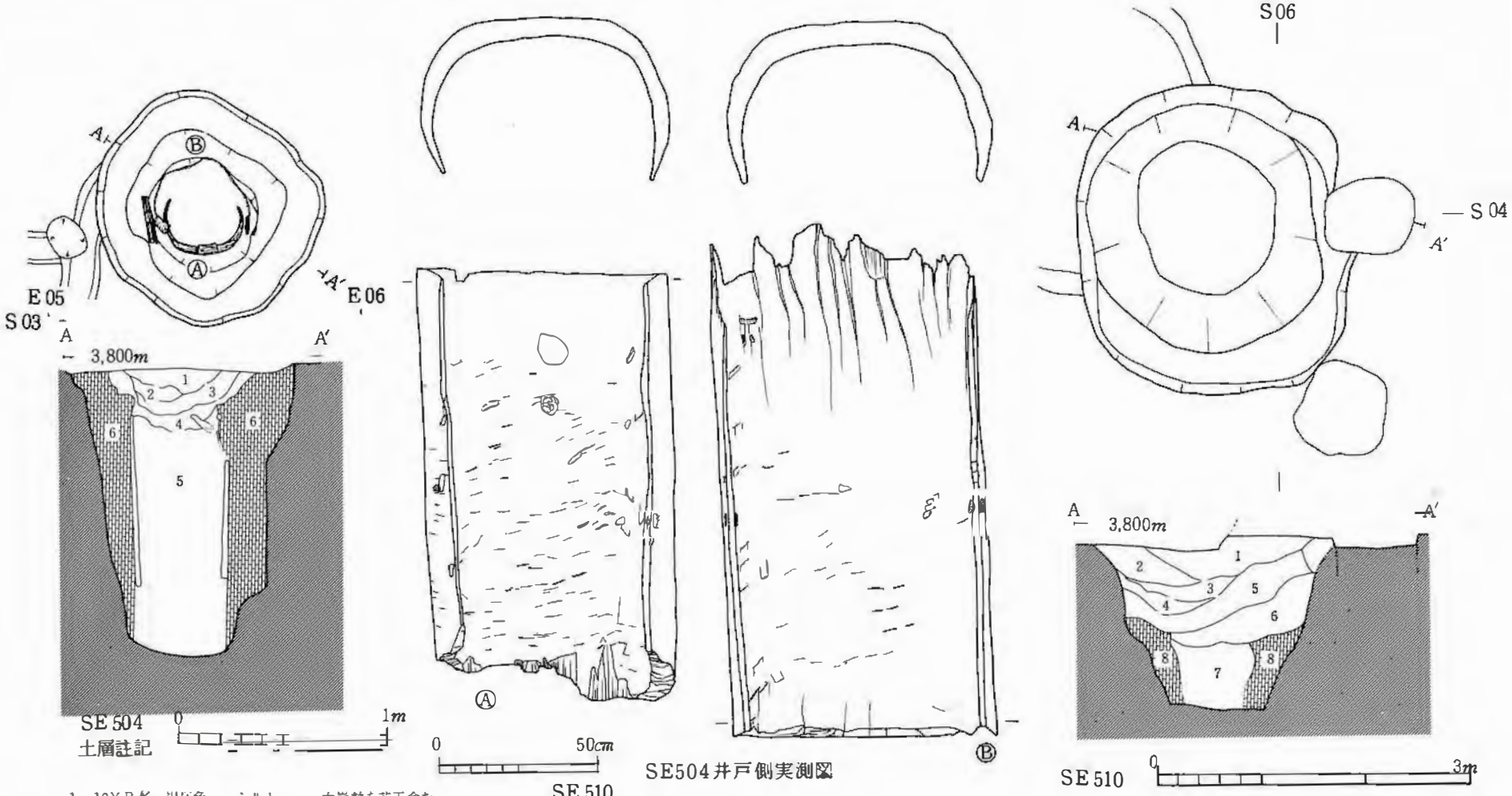
(3) 溝　　跡

溝跡は調査区全域にわたって総数28条検出している。以下主要なものについて記述する。

SD545：調査区のほぼ全域、地山上面で検出した小溝群である。これらは北で東に若干振れる程度でおさまる方位の共通性をもつ。さらにこれらに直交する一群も存在する。確認できる長さは各々一様ではないが、幅20～30cm、深さ10cm前後を計る。重複関係では他のすべての遺構に切られるため、本調査区検出遺構の中で最も古い遺構の一群とすることができる。

この他、検出面、重複関係、遺構の規模等から、これら小構群に該当しない溝跡について以下に記述する。

SD534：調査区西半部、地山上面で検出した南北方向の溝跡である。　重複関係からSK507・513、SB479・480・485・486より古い。方向はN—12°—Eである。確認できる長さは約

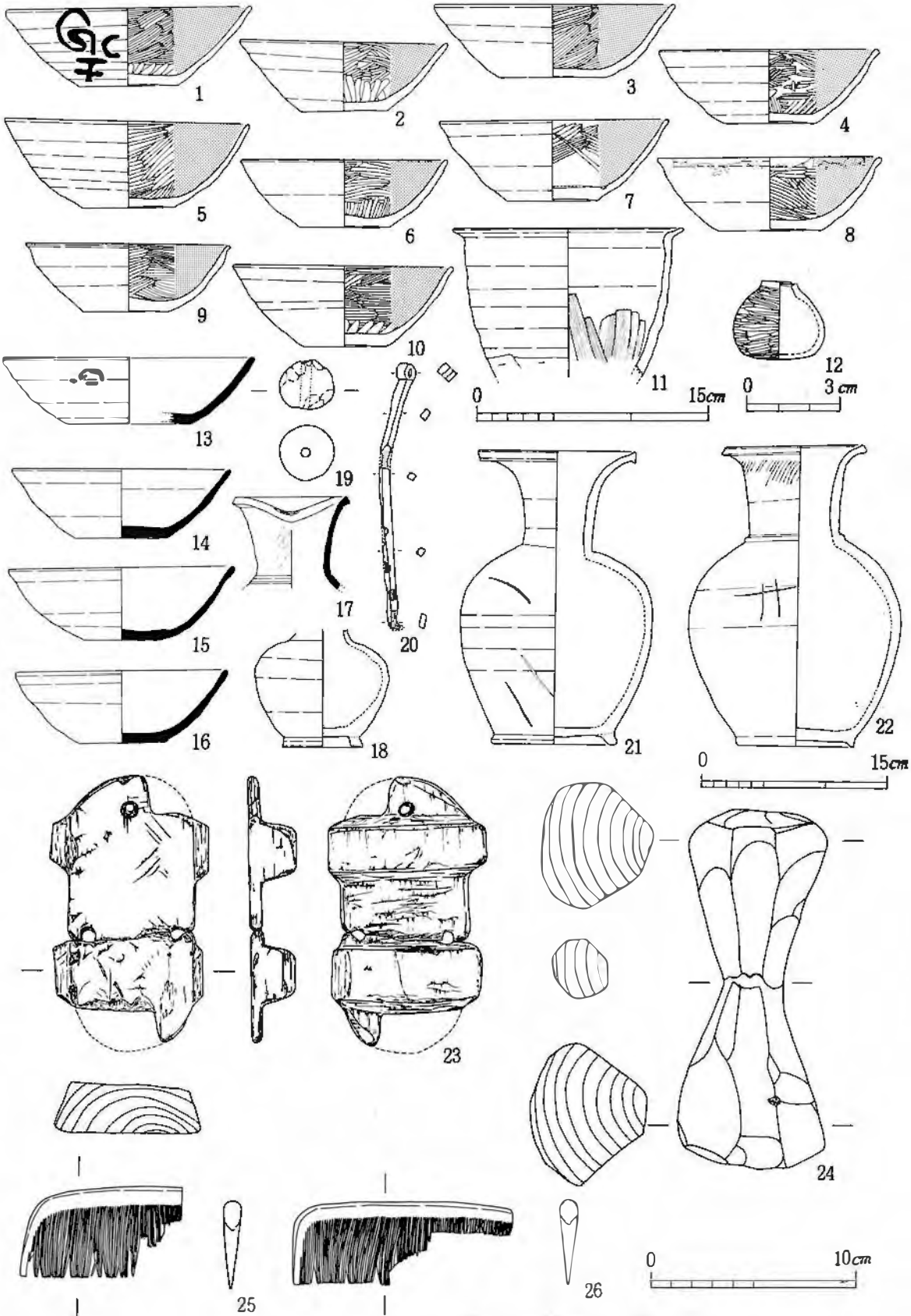


1	10YR7/4	褐灰色	シルト	木炭粒を若干含む
2	〃	〃	〃	〃
3	10YR7/4	黒褐色	〃	シルトと木炭粒が半々位まじる
4	10YR7/4	灰白色火山灰		灰白色火山灰の自然堆積層
5	10G 5/1	暗緑灰色	砂質シルト	グライ化
6	10YR5/6	にぶい黄橙	シルト	(掘り方埋土)

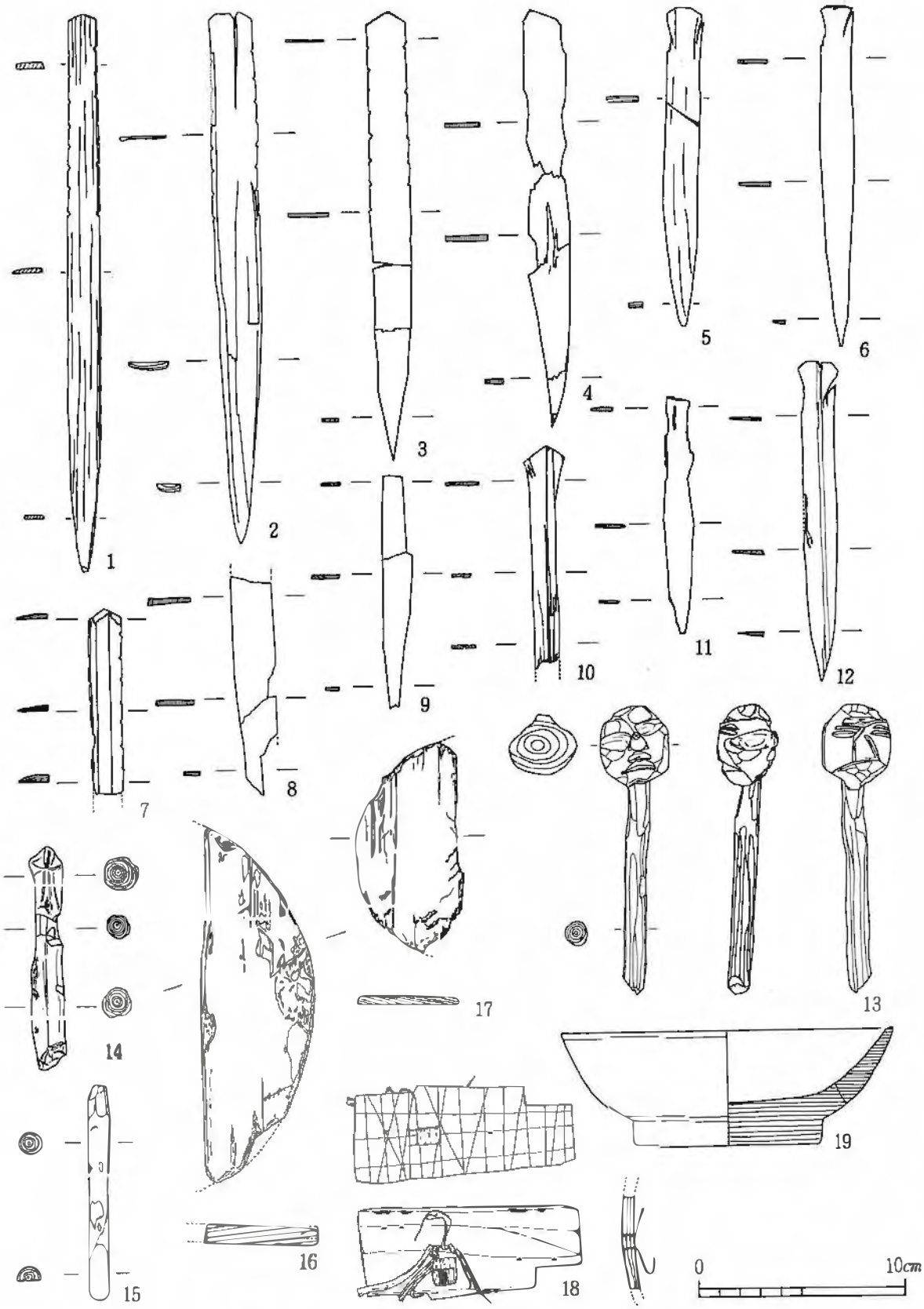
1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	木炭粒含む
2	10YR7/4	黒褐色	〃	〃 地山ブロック含む
3	〃	〃	粘土	〃
4	〃	〃	シルト	〃 地山ブロック含む

5	10YR7/4	黒褐色	シルト	木炭粒、地山ブロック含む
6	〃	〃	〃	〃
7	10YR7/4	黒色	粘土	
8	7.5Y5/3	オリーブ黄	〃	地山ブロック含む(掘り方埋土)

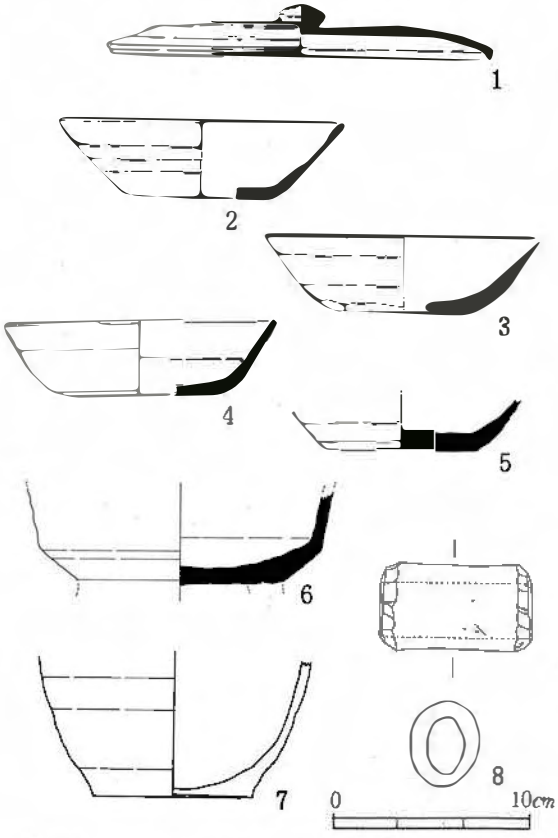
第19図　SE504・510 実測図



第20図　ＳＥ504 井戸跡出土遺物実測図



第21図　ＳＥ504井戸跡出土遺物実測図（木製品）



第22図　ＳＥ510 井戸跡出土遺物実測図

14mで、幅１ｍ、深さ25cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層で人為的な埋戻しである。遺物は須恵器片が出土している。

ＳＤ535：　調査区東半部の北側拡張区北壁近くの地山上面で検出した東西方向の溝跡である。重複関係からＳＢ474より新しい。方向はＮ－10°－Ｅである。確認できる長さは14.7mで、幅50cm、深さ10cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕の破片が若干出土している。

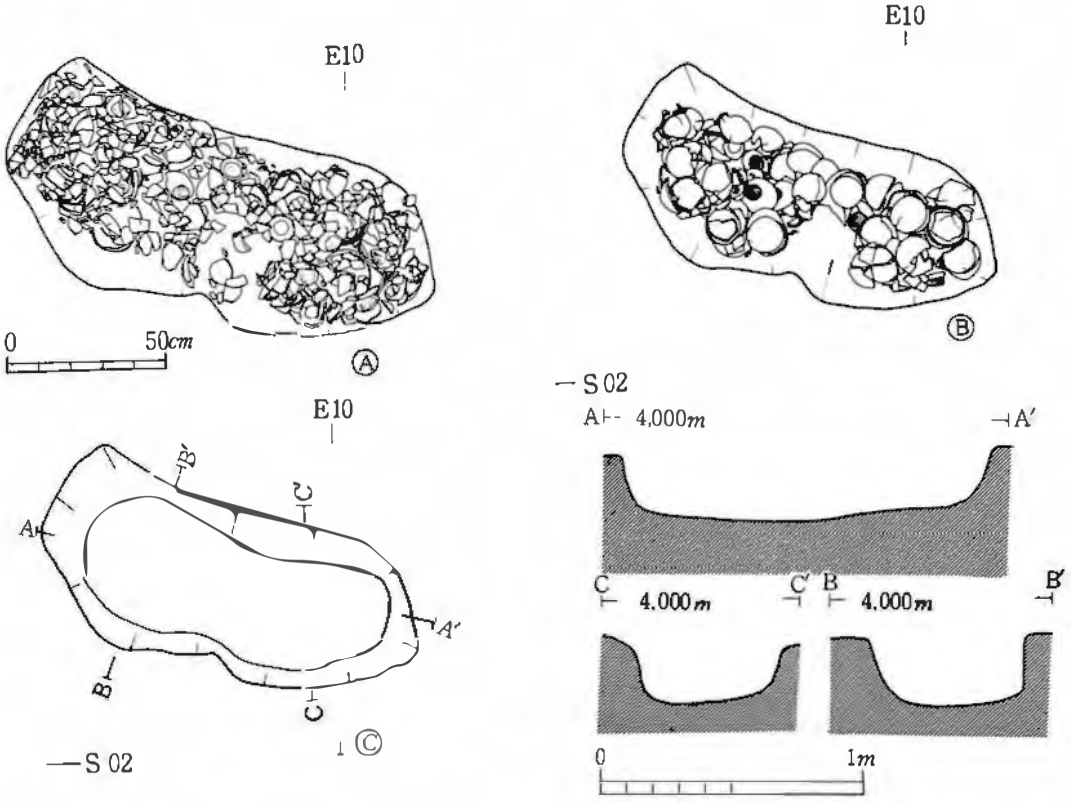
ＳＤ536：　調査区東半部の北側拡張区ＳＤ535の北側に隣接して検出した。重複関係よりpitより新しい。　方向はＳＤ535とほぼ平行する。確認できる長さは6.5ｍで、幅30cm、深さ４cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器甕、須恵器杯の破片が出土している。

ＳＤ537：　調査区ほぼ中央の南壁付近で検出した東西方向の溝跡で、南壁近くで屈曲する。重複関係からＳＸ548より古く、ＳＫ514・546より新しい。確認できる長さは4.6ｍで、幅30cm、深さ８～10cmを計る。遺物は須恵器杯・甕の破片がわずかに出土している。

ＳＤ538：　調査区のほぼ中央付近のⅣ層上面で検出した逆Ｌ字型に屈曲する溝跡である。重複関係からＳＸ549・550、ＳＤ545より新しい。確認できる長さは約５ｍで、幅30cm、深さ５～10cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層で焼土粒を多く含む。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している（第３図10～16）。

(4) 特殊遺構

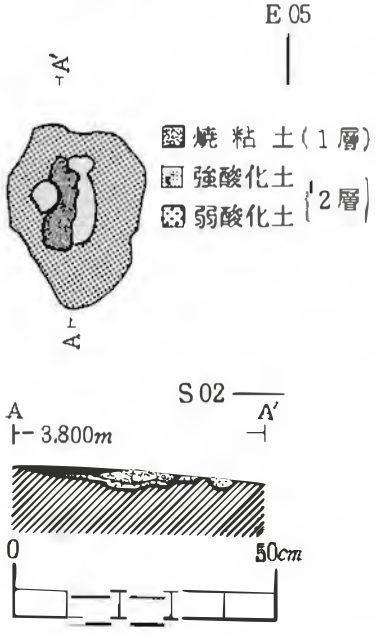
ＳＸ543：　調査区東半部のほぼ中央、ＳＢ474の南側に隣接し、Ⅳ層上面で検出した。Pitと重複しておりこれより新しい。　平面形は不整方形で、長軸1.4ｍ、短軸0.6ｍ、深さ20cmを計る。方向はＥ－19°－Ｓである。埋土は黒褐色シルト層で５～10cmの厚さを計る。層中には灰白色火山灰粒が含まれる。遺物の出土状況は検出面では土圧でつぶれて破片となっていた（第23図Ⓐ）が、それを除去したところ土師器、赤焼き土器杯等が混在して３～４枚重なっ



第23図　SX543 実測図

ている状況（第23図Ⓑ）が認められた。また破片についてもほとんどが接合関係にあるため埋納時にはすべて完形であったと推定される。内面には油煙等の付着物は見られない。総点数（破片も含む）は265点以上にのぼるとみられる（第７表）。この他、埋土中（検出面）より瓶もしくは水注の可能性のある青磁の口縁～肩部にかけての破片が出土した。内面には化粧土を施している（第31図38）。

ＳＸ544：　調査区の西半やや北寄りに位置し、地山上面で検出した。ＳＢ 481 と重複するが、直接の切り合いをもたないため新旧関係は不明である。平面形は不整楕円形で、長径０.７ｍ、短径0.５ｍを計り、中央に強く粘土が焼けている土と、その周辺が酸化している土が認められた。方向は発掘基準線にほぼ一致する。土層は１層が焼けた粘土層。２層がこげ土と焼土の混じる層である。厚さは前者が５cm、後者が２cmを計る。遺物は出土していない。



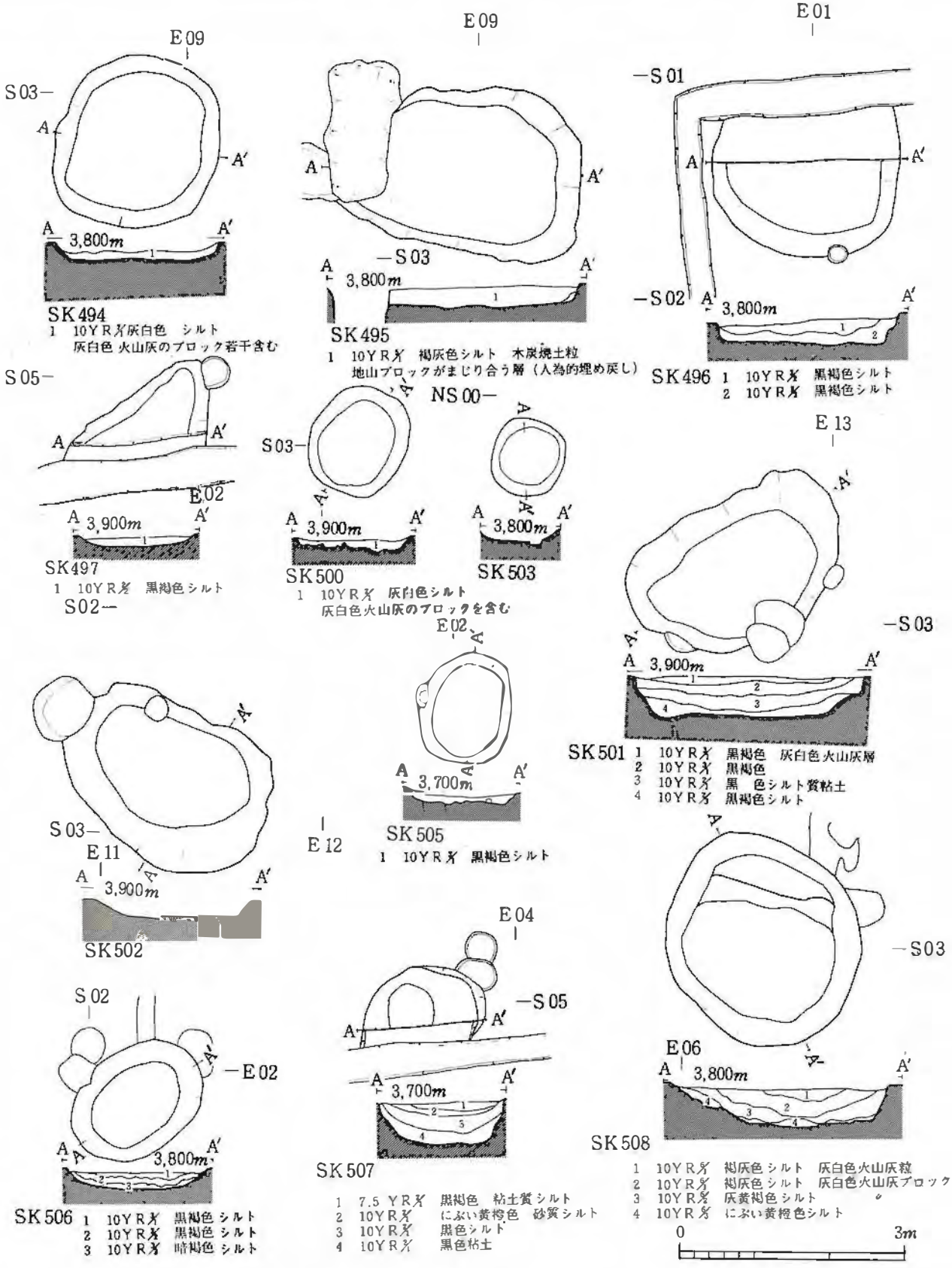
第24図　SX544 実測図

(5) 土　　坑

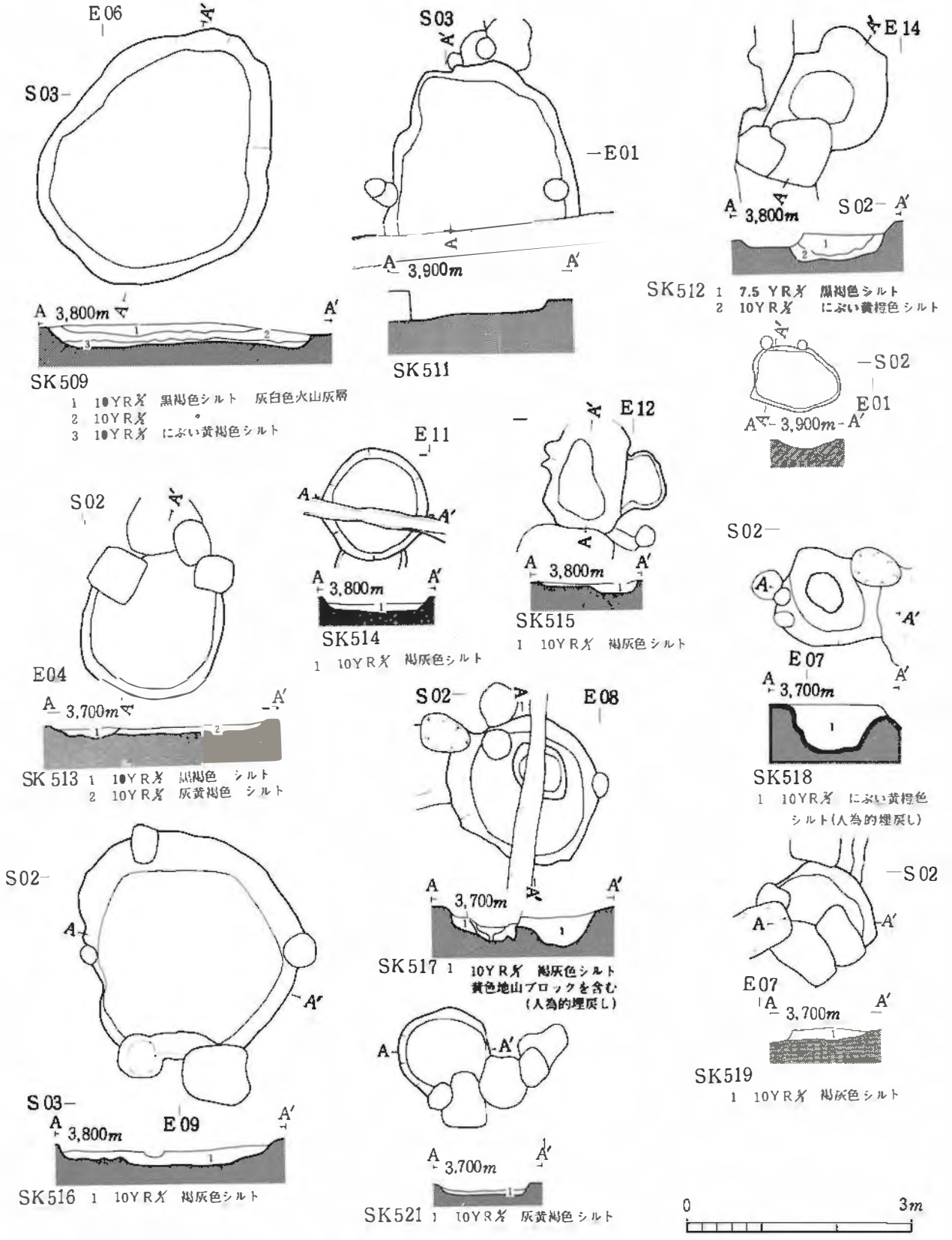
これらについては主要なものを以下の表に示した。

遺構名	平面形	検出面	規模(長軸×短軸×深さm)	重複関係	特記事項	備考
SK494	円形	L－Ⅳ層上面	2.32 × 2.13 × ——	SK495 ——→SK494		
495	方形	L－Ⅳ層上面	2.63×2.23×0.28(最大)	SK495 ——→SK494		左側が攪乱によって失われている。
496	楕円形	地山上	2.50×1.89以上×0.34(最大)			北側は調査区外に延びており全容は不明
497	不整形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)				南側は調査区外に延びており全容は不明
498	楕円形	L－Ⅳ層上面	1.51 × 1.28 × 0.16		埋土に灰白色火山灰を含む	
499	円形	L－Ⅳ層上面	1.53 ×0.15(最大)	SK499—SK502		
500	方形	L－Ⅳ層上面	1.54 × 1.21 × 0.12		炭化物、焼土ブロックを含む	
501	不整形	L－Ⅳ層上面		SB475—SK501—SB476		
502	不整形	L－Ⅳ層上面	2.79 × 2.12 × ——	SK499—SK502—SB475 SB476		
503	円形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)			非ロクロ土師器出土	
505	円形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	1.42 ×0.12 × ——			
506	楕円形	L－Ⅳ層上面	1.9 × 1.4 × 0.22	SD541 ——→SK506		
507	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	1.69 × —— × 0.56	SD534 ——SK507		
508	楕円形	L－Ⅳ層上面	2.89 × 2.46 × 0.5		埋土に灰白色火山灰を含む	
509	楕円形	L－Ⅳ層上面	3.53 × 2.92 × 0.24	SE510 ——→SK509	埋土に灰白色火山灰を含む	
511	楕円形	地山上	2.1m × —— × 0.39		西側に分布するA層除去後発見された。	
512	方形	L－Ⅳ層上面		SK512 ——SB474	掘り方の可能性あり	
513	楕円形	L－Ⅳ層上面	2.06 × 1.89 × 0.17	SB485→SK459→SB480		
514	円形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	1.42 × 0.11	SK514 ——SD537		
515	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	1.33 × —— × 0.12	SK526 ——→SK515		
516	楕円形	地山上	2.91 × —— × 0.22	SK516 ——SB474		
517	楕円形	地山上	2.08 × 1.73 × ——	SK518 ——SK517		
518	不整形	地山上		SK518 ——→SK517		
519	不整形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)		SK519 ——SE483		
520	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)		SK525 ——→SK520		
521	円形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	1.22 × —— × 0.15			
522	方形	L－Ⅳ層				
523	不整形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)				
524	不整形	地山上				
525	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)		SK525 ——→SK520		
526	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	0.86 × —— × 0.35			
527	円形?	地山上				北側は調査区外に延びているため全容は不明
528	不整形	地山上				
529	方形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)	3.53×1.56×0.14			
530	不整形	L－Ⅳ層上面				
531	不整形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)				
532	不整形	地山上(L－Ⅳとの関係は不明)			A層を切っている。	

第2表　土坑の概要


E09
S03
A
A′
3,800m
SK494
1 10YR7/1灰白色 シルト
灰白色 火山灰のブロック若干含む
E09
S03
A
A′
3,800m
SK495
1 10YR7/1 褐灰色シルト 木炭焼土粒
地山ブロックがまじり合う層（人為的埋め戻し）
E01
S01
S02
A
A′
3,800m
SK496 1 10YR3/1 黒褐色シルト
2 10YR3/1 黒褐色シルト
S05
A
A′
E02
3,900m
SK497
1 10YR3/2 黒褐色シルト
S02
S03
NS00
A
A′
3,900m
SK500
1 10YR7/1 灰白色シルト
灰白色火山灰のブロックを含む
3,800m
SK503
E13
S03
A
A′
3,900m
SK501 1 10YR3/1 黒褐色 灰白色火山灰層
2 10YR3/1 黒褐色
3 10YR3/1 黒 色シルト質粘土
4 10YR3/1 黒褐色シルト
E02
3,700m
SK505
1 10YR3/1 黒褐色シルト
S03
E11
E12
3,900m
SK502
S02
E02
3,800m
SK506 1 10YR3/1 黒褐色 シルト
2 10YR3/1 黒褐色 シルト
3 10YR3/1 暗褐色 シルト
E04
S05
3,700m
SK507
1 7.5 YR3/1 黒褐色 粘土質シルト
2 10YR3/1 にぶい黄橙色 砂質シルト
3 10YR3/1 黒色シルト
4 10YR3/1 黒色粘土
S03
E06
3,800m
SK508
1 10YR3/1 褐灰色シルト 灰白色火山灰粒
2 10YR3/1 褐灰色シルト 灰白色火山灰ブロック
3 10YR3/2 灰黄褐色シルト
4 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
0
3m

第25図　土 坑 実 測 図 (1)


E06
S03
A 3,800m
A'
SK509
1 10YR 黒褐色シルト 灰白色火山灰層
2 10YR
3 10YR にぶい黄褐色シルト
S03
E01
A 3,900m
SK511
E14
S02
A 3,800m
SK512 1 7.5 YR 黒褐色シルト
2 10YR にぶい黄褐色シルト
S02
E01
A 3,900m
S02
E04
A 3,700m
SK 513 1 10YR 黒褐色 シルト
2 10YR 灰黄褐色 シルト
E11
A 3,800m
SK514
1 10YR 褐灰色シルト
E12
A 3,800m
SK515
1 10YR 褐灰色シルト
S02
A
E07
A 3,700m
SK518
1 10YR にぶい黄褐色
シルト(人為的埋戻し)
S02
E08
A 3,700m
SK517 1 10YR 褐灰色シルト
黄色地山ブロックを含む
(人為的埋戻し)
S02
A
E07
A 3,700m
SK519
1 10YR 褐灰色シルト
S02
A
S03
E09
A 3,800m
SK516 1 10YR 褐灰色シルト
A
A 3,700m
SK521 1 10YR 灰黄褐色シルト
0
3m

第26図 土坑実測図(2)

V 考　　察

(1) 遺　物

施釉陶器

今回出土した施釉陶器は破片数にして195点を数え、その内訳は灰釉陶器153点（内底部片18点）、緑釉陶器33点（内底部片 5点）、青磁 4 点、白磁 4 点、褐釉陶器 1 点である。

これらを器種別にみると、灰釉陶器には碗・段皿・耳皿・瓶・取手付瓶が、緑釉陶器には椀・段皿・三足盤・耳皿が、青磁には碗・小瓶が、白磁には碗が認められた。

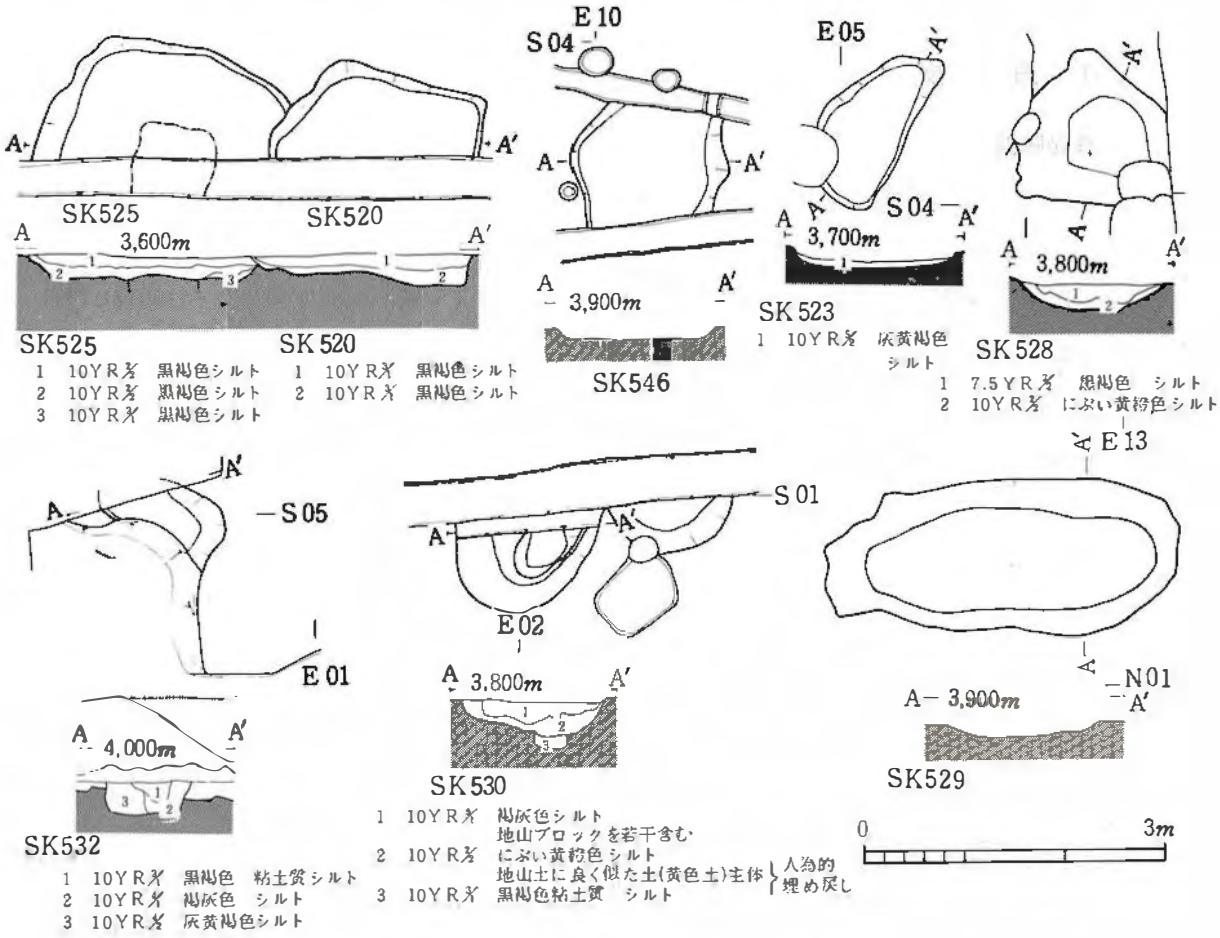
灰釉陶器は、図化できたものが15点ある。胎土はほとんどが灰白色および灰色を呈し、焼成は堅緻である。釉の色は淡緑色と明灰色の 2 者に大別される。以下、器形、成形、調整、釉調等から椀をタイプ分類してみると、 2 者に分けられる。Ⅰ類（第 3 図24他）：体部が比較的内湾しながら緩やかに立ち上がり、口縁端部が強く外反する。高台はいわゆる三ケ月高台で、外面底部は回転ヘラケズリおよび、回転ナデ調整が施される。また体部下半にも回転ヘラケズリが施される。施釉方法は刷毛塗りで内外面に施釉されている。内面には重ね焼きのリング状痕跡が残る。Ⅱ類（第 9 図 6 ）：体部が比較的直線的に立ち上がり、そのまま外反せずに至るものである。高台は体部の底部際に付けられ、外面底部には回転糸切り痕が残る。施釉方法は漬け掛けによって口縁部付近の内・外面に施釉される。

これらのⅠ・Ⅱ類については、東海地方の猿投窯編年による黒笹90号窯式・折戸53号窯式にそれぞれ比定することができる。量的には、Ⅰ類がその大半を占め、Ⅱ類については図化資料が 1 点、口縁部破片 1 点が確認されたのみである。産地はそのほとんどが東濃産と推定される。他の器種についても、黒笹90号窯式に併行する東濃産のものであろう。

緑釉陶器は、図示できた資料が 3 点ある。胎土は暗灰色で硬質なもの、灰白色で軟質のもの、釉の色には大別して濃緑色と淡緑色とがある。第 3 図23は推定口径16.8㎝、器高2.9㎝を計るいわゆる三足盤である。第 8 図 2 ・24は底部破片資料である。後者が貼付高台で、高台内面に沈線状の段を有する。前者の高台は削り出し高台で、器内面には重ね焼きの痕跡が認められる。前者については高台の特徴から京都産、それ以外のものについてはおおむね猿投窯産（註1）と推定されるが、一部尾北のものも含まれている。

褐釉陶器（第 8 図 3 ）は、瓶もしくは水注と考えられ、胎土は褐色で白い粒子を混入する。釉は黄褐色で、釉溜りでは暗褐色に発色している。中国産、唐代の製品とみられる。

青磁は図示できた資料（第31図38）が 1 点あり、瓶もしくは水注と考えられる。これは短く直立する口頸部と瓜割りにした胴部からなり、肩部に小形の縦耳の残欠を残している。胎土は淡黄褐色を呈しやや粗質である。化粧土は灰白色で内外面にみられ、釉は暗黄緑色で外面全て



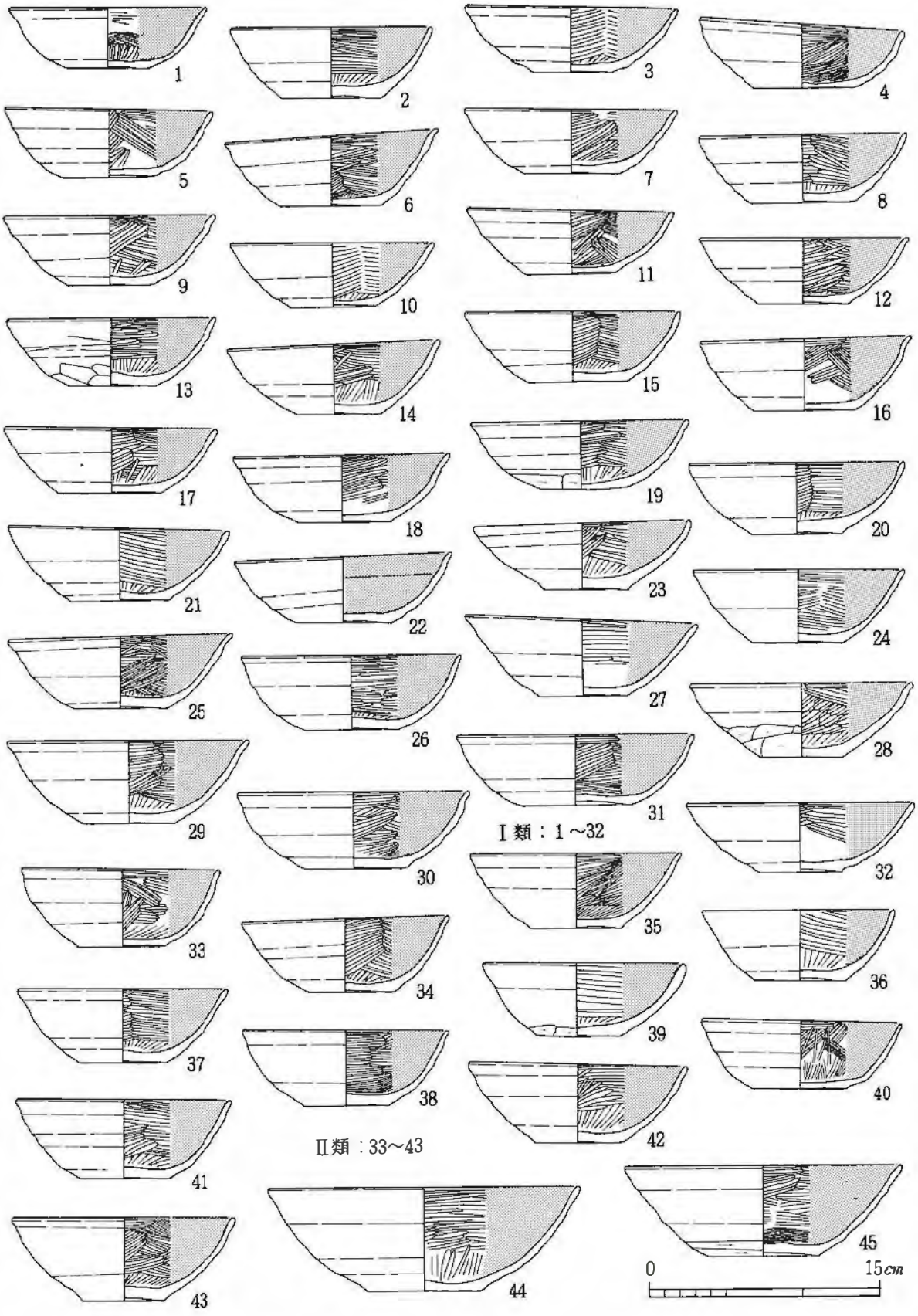
第27図　土 坑 実 測 図 (3)

と顎部内面までかけられている。この他に椀の底部・口縁部・体部片が各１点ずつある。底部片の高台はいわゆる輪高台のものである。後者らについては越州窯系青磁と考えられる。(註２)。

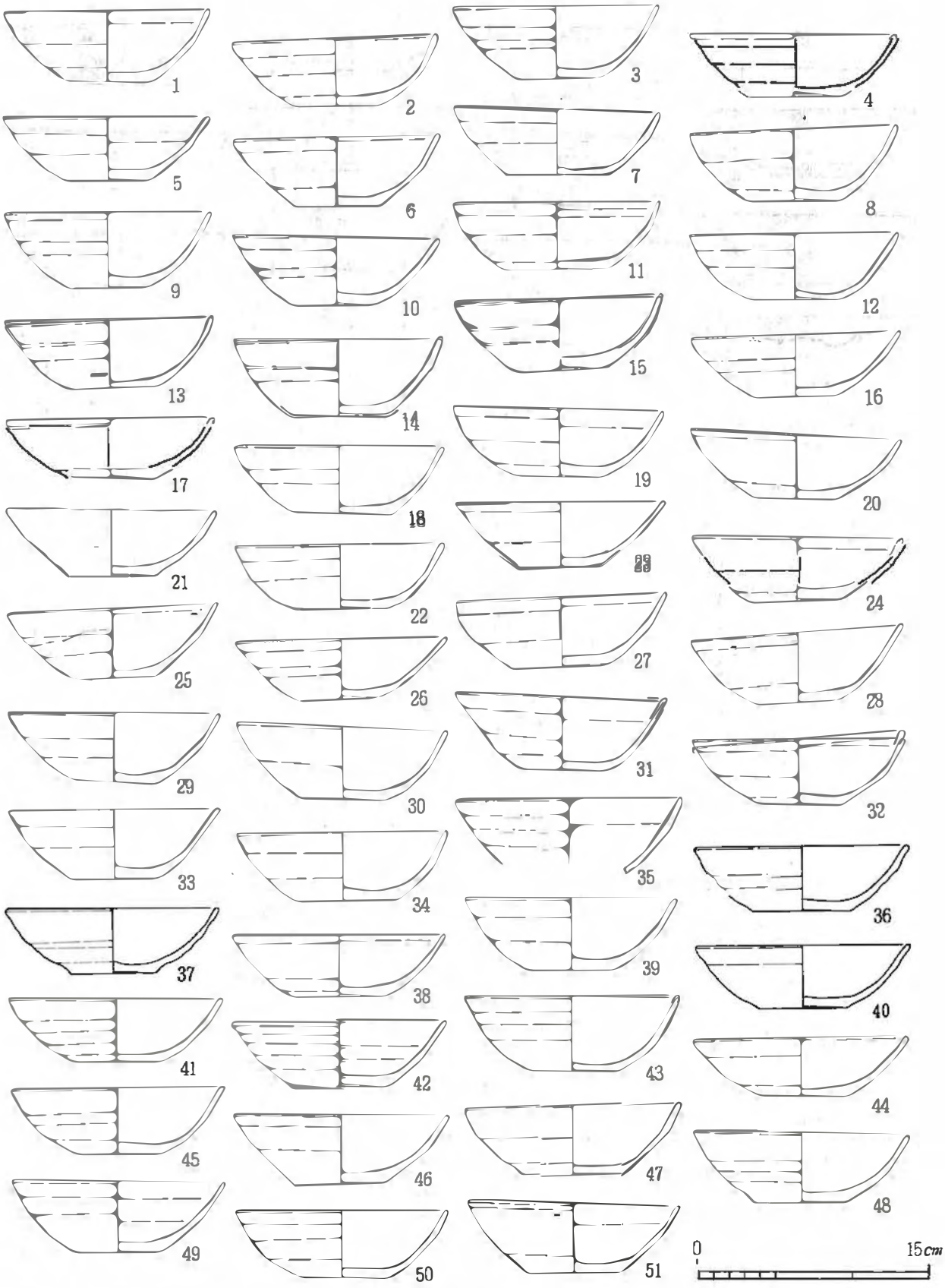
白磁は図示できたものはないが、口縁・体部・底部の破片がある。口縁部資料は口縁を折り返した際に小孔が断面に見えるものである（写真図版7・18）。底部資料は蛇目高台のものである（写真図版７・19）。これらの特徴から定窯系の白磁と考えられる。

ＳＸ543出土土器について

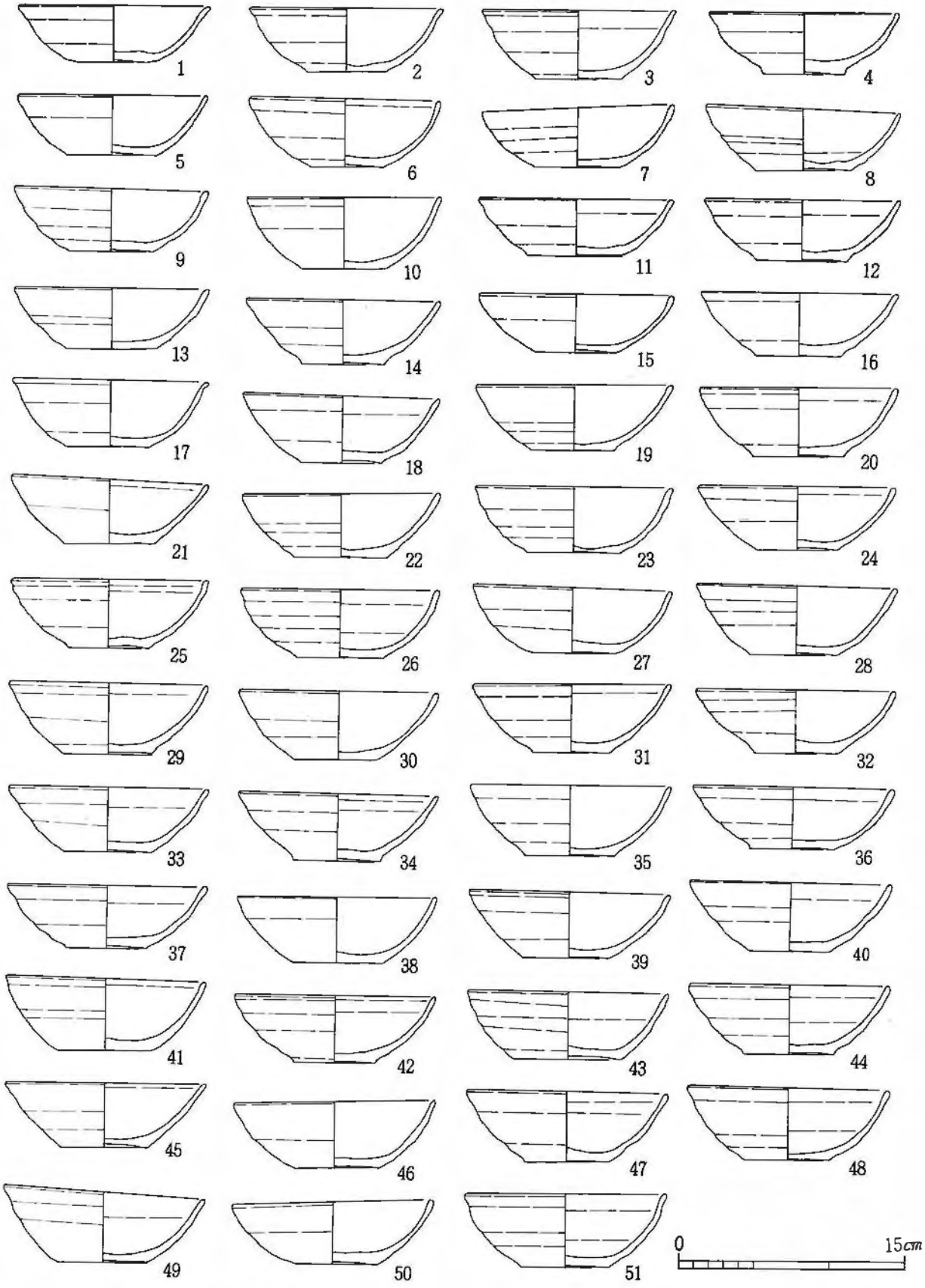
本遺構出土土器組成については第７表に示した通りで、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯・皿の器種が認められた。主体となっているのは杯である。杯のみの器種比率は土師器33%・須恵器１%・赤焼き土器66%である（註３）。土師器杯の法量は口径12.5～16.1 cm・平均13.5cm、底径5.1 cm～7.3 cm・平均6.0 cm、器高3.9 cm～6.7 cm・平均4.7 cm、口径：底径が１：0.36～0.51で平均0.42、口径：器高が１：0.3 ～0.4 で平均0.33である。赤焼き



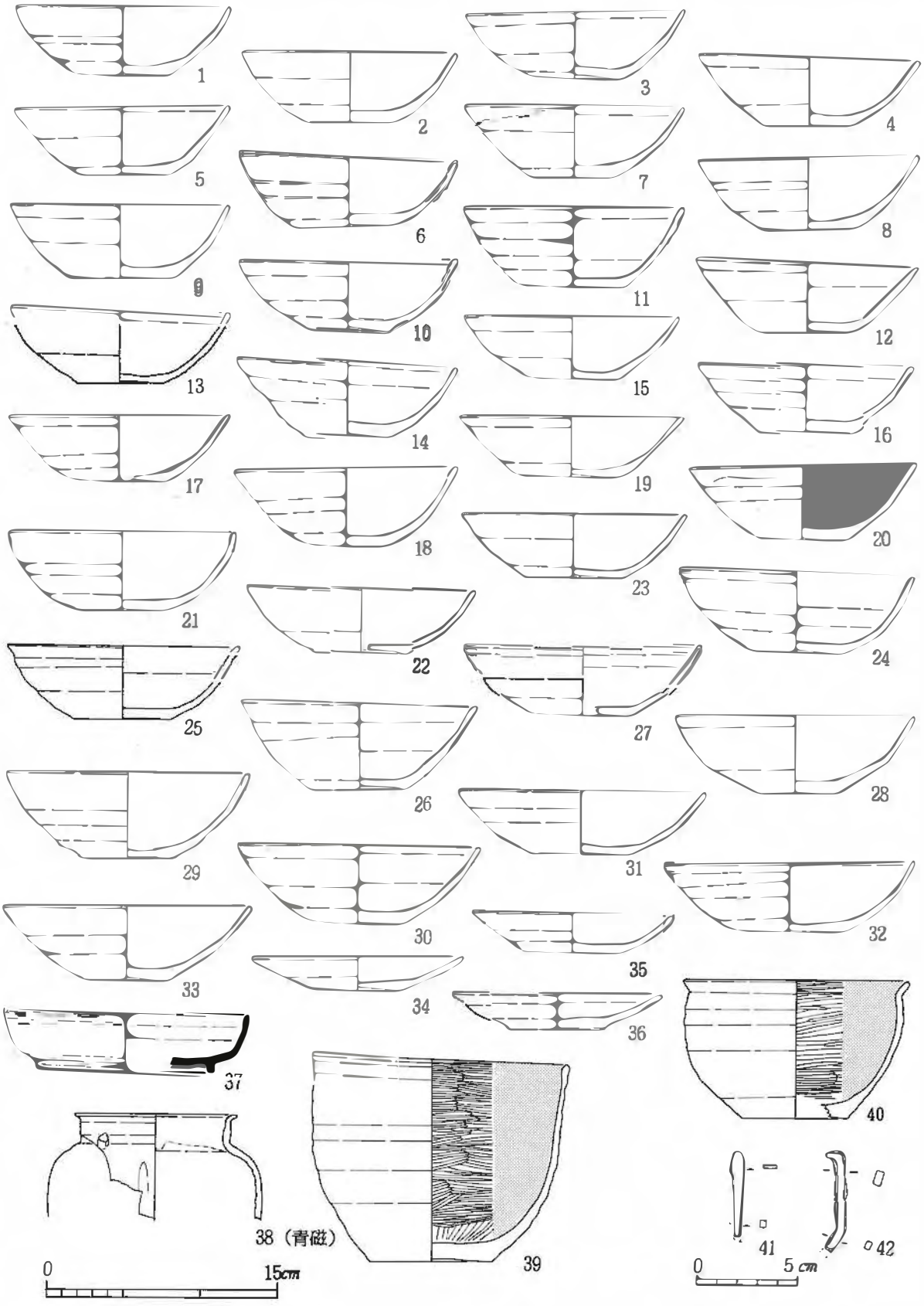
第28図　SX543 出土土器実測図（土師器）



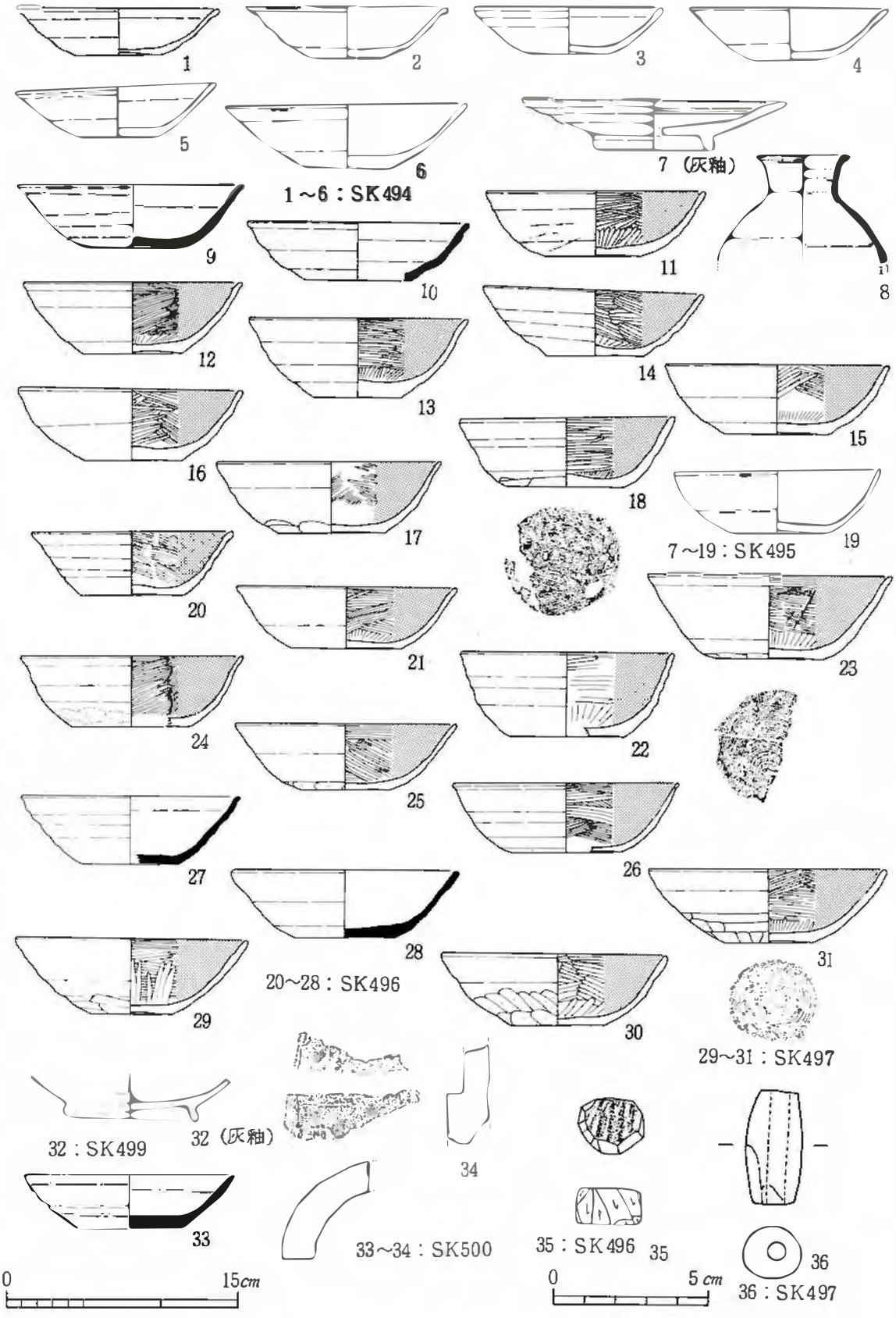
第29図　SX543 出土土器実測図（赤焼き土器）



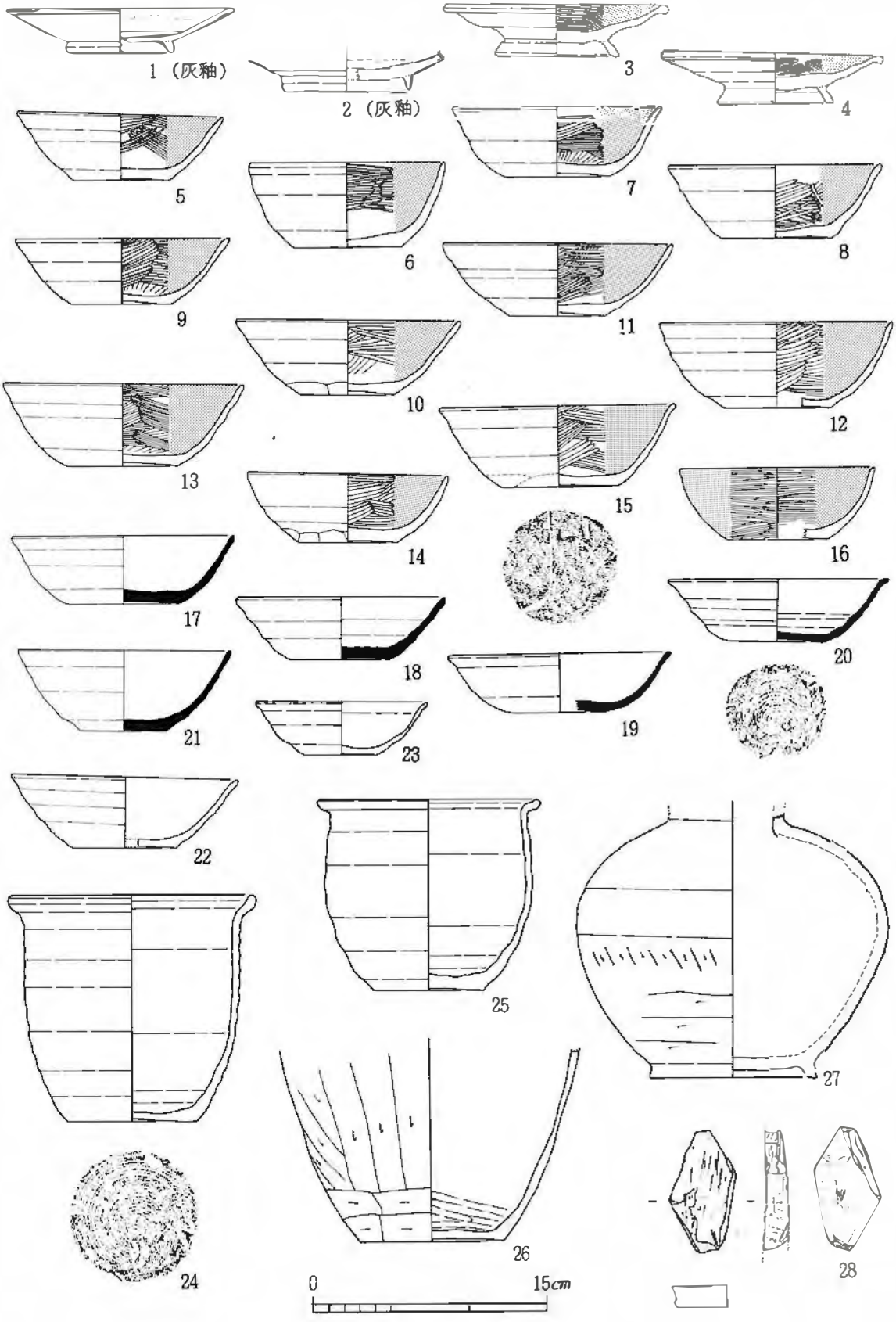
第30図　SX543 出土土器実測図（赤焼き土器）



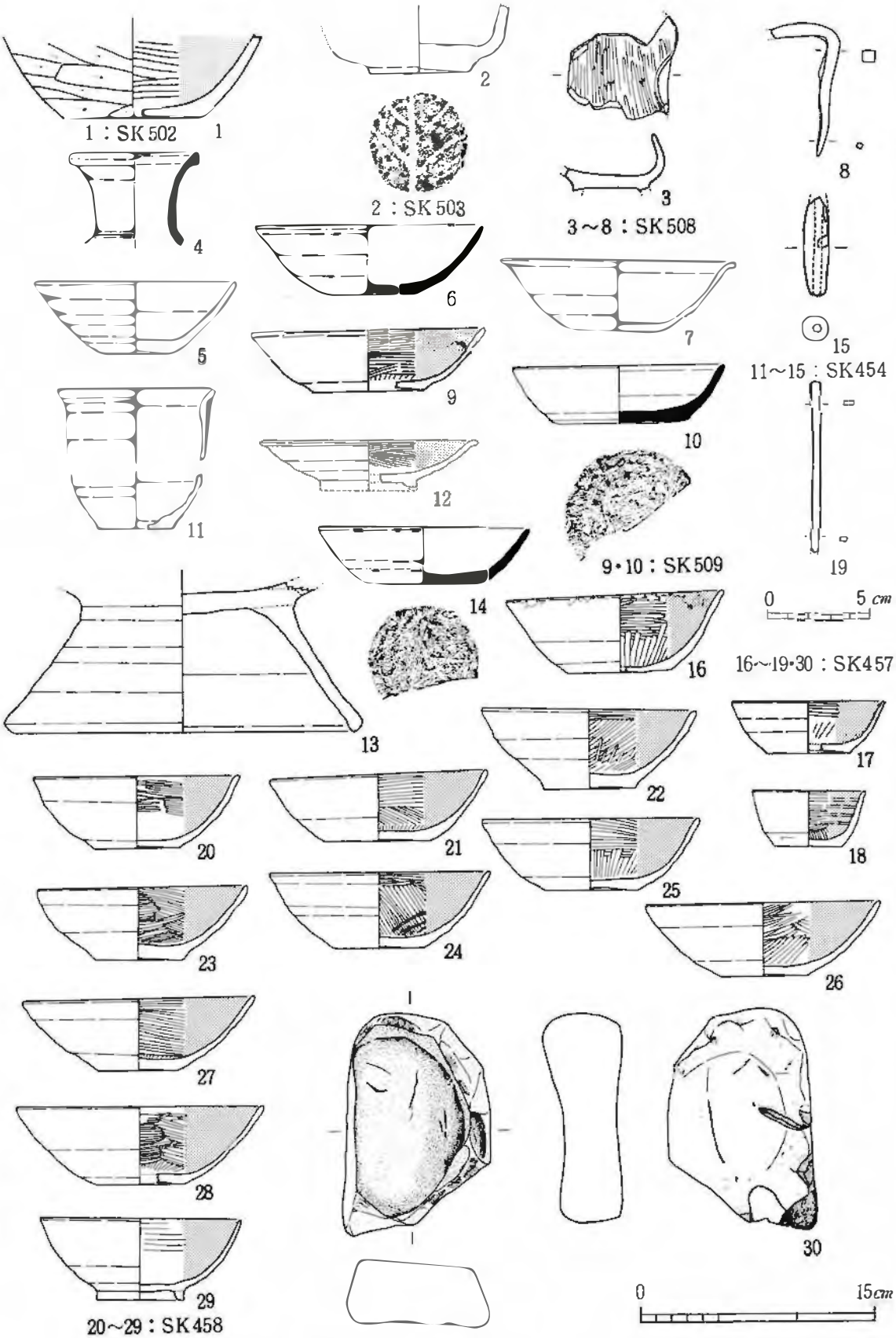
第31図　SX543出土遺物実測図（赤焼き土器他）



第32図　土坑出土遺物実測図



第33図　SK501土坑出土遺物実測図



第34図　土坑出土遺物実測図

土器杯は口径12.6cm～16.2cm・平均13.8cm、底径4. 8cm～7.2 cm・平均5.8 cm、器高3.8 cm～5.9 cm・平均4.5 cm、口径：底径が1 ：0.34～0.53で平均0.42、口径：器高が1 ：0.26～0.39で平均0.33である。

図化できた資料は土師器杯50点・甕2点、赤焼き土器杯135点・皿2点、 須恵器高台付杯1点である。以下、図化したものを対象に特徴を記述していく。

〈土師器〉

大型杯

2点ある（第28図44・45）。法量は口径17.9cm・20.3cm、底径6.9 cm・7.3 cm、器高5.9 cm・6.7 cmで、底口比が 039・0.36、高口比がともに0.33である。底部の切り離き技法は回転糸切りで無調整である。

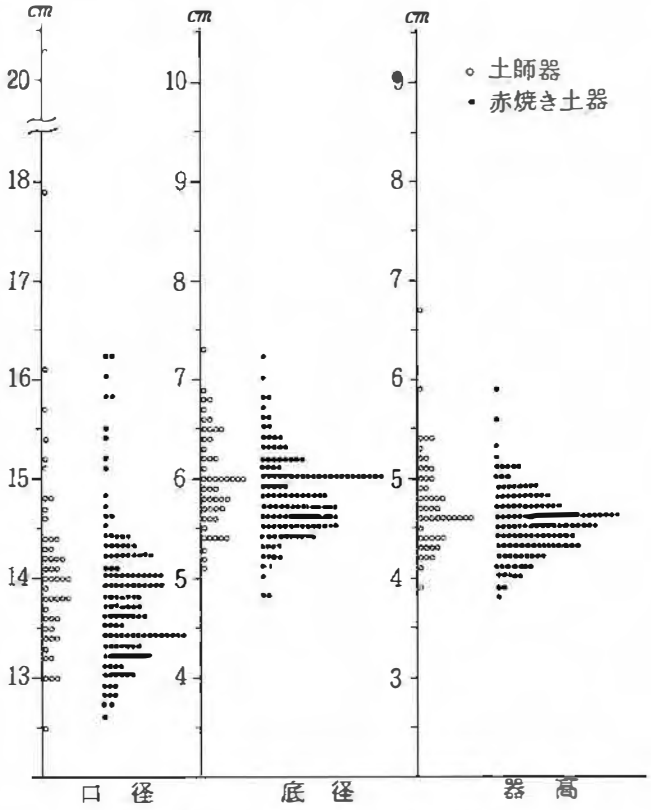
杯

図化できたものが48点ある。口径は12.5cm～16.1cmに分布しているが、ほとんどが（約9割）13cm～15cmの間に収まる。底径は5.1 cm～6.8 cmに分布しているが6cm前後に集中する。平均6.0 cmである。器高は3.9 cm～5.4 cmに分布し、4cm～5cmの間に多く集中している。平均4.7cmである。底口比（口径：底径）は1 ：0.36～0.51で、平均0.42である。 高口比は0.3 ～0.4 に収まるが器形が全体に口径に対して器高が低くやや扁平な感じのものⅠ類：0.30～0.34と比較的深い器形のものⅡ類：0.35～0.4 の2者に分けられる。 これらの杯はすべてロクロ調整されており、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部の特徴にはA：回転糸切り整整のもの、B：回転糸切りで周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されるもの、C：底部全面から周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整が施され切り離しが不明なものがある。ただしB・Cについては4点（註4）と非常に割合は少ない。

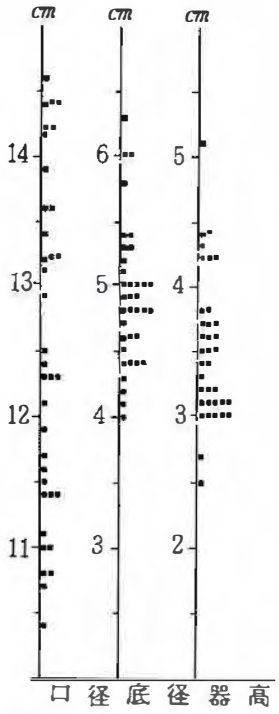
〈赤焼き土器〉

杯

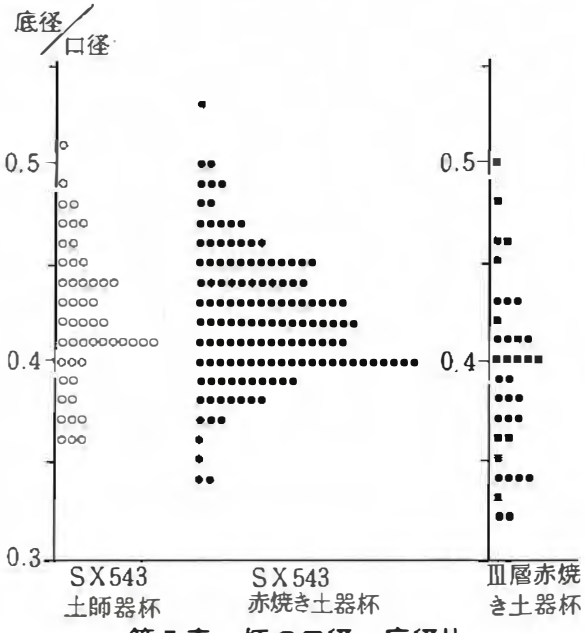
図化できたものが135点ある（第29～31図）。 口径は12.6cm～16.2cmに分布し、約9割が13cm～15cmの間に集中する。 平均13.8cmである。底径は4.8 ～7.2 cmに分布し6.0 cm に一時ピークがあるが、5.0 cm～6.5 cmの間に9.5割が集中する。平均5.8 cmである。 器高は3.8 cm～5.9 cmに分布し4.6 cmをピークとして単純減少している。4cm～5cmの間に約9割が収まり平均4.5 cmである。底口比は0.34～0.53で、0.4 cmに一時ピークがあるものの総じてみると0.4 ～0.43を頂点とし単純減少している。平均0.42である。高口比は0.26～0.39で、大半が0.3 ～0.35に集中している。平均0.33である。これらの法量データより、そのほとんどがあるピークをもち、それから単純減少し上下対称のグラフになることから、特に細分して分類は行っていない。これらの杯はすべてロクロ調整されており、切り離し技法は回転糸切りで無調整で



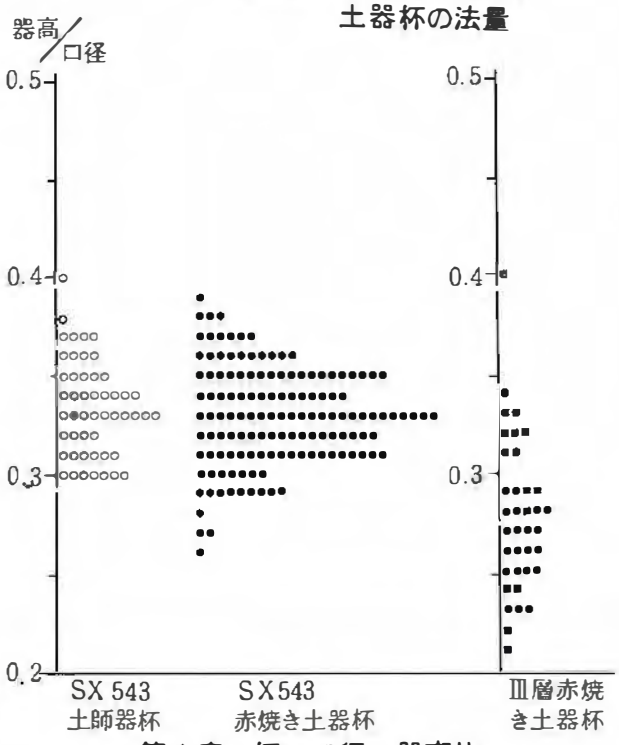
第3表　SX543 出土杯の法量



第4表　Ⅲ層出土赤焼き土器杯の法量



第5表　杯の口径：底径比



第6表　杯の口径：器高比

土師器							須恵器		赤焼き土器	
杯				甕		高台杯	高台杯		杯	皿
回転糸切り	回転糸切りのち体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ	体部下端～底部全面手持ちヘラケズリ	不明	回転糸切り内面ヘラミガキ・黒色処理	木葉痕	回転糸切り	回転ヘラ切り	静止糸切り	回転糸切り	回転糸切り
75	4	2	2	2	1	1	1	1	173	3
87（33%）							2（1%）		176（66%）	
合計 265（100%）										

第7表　SX543出土土器組成表（底部破片も含む全資料対象）

ある。また、体部外面にロクロ調整する以前の斜行する粘土紐痕が認められるものもある。

Ⅲ

図化できたものが3点ある（第31図34～36）。これらは、口径13.1cm～13.8cm、底径5.7～6.3 cm、器高2.2 cm～2.6 cmとなる。底口比が0.41～0.48、高口比が0.16～0.20である。底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで無調整である。

さて以上のような内容を持つ土器群については、隣接する第4次調査区でも検出（SK161土坑）しており(註5)、両者をほぼ同時期のものと考えている。SK161土坑の年代については灰白色火山灰(註6)との関係から10世紀前半頃と推定している。また、多賀城跡内出土土器と比較した場合では、10世紀前半頃とされているE群土器（註7）の様相に類似する。したがって本遺構出土土器群はこれらの年代観から10世紀前半頃とするのが妥当かと思われる。

土坑の性格については、その出土状況から多量の土器を一括して埋納したものであり、非常に特異な状況であるといえる。このような一括して埋納した例は、前述の山王遺跡第4次調査のSK161土坑、高崎遺跡井戸尻地区検出の土坑の例が知られている。前者では、道路跡に隣接することや、杯内面に付着する油煙状付着物に着目し「万燈会」に関わる儀式に使用され廃棄したものと考えている（註8）。また井戸尻地区の杯にも同様な付着物がみられる（註9）。今回検出したSX543出土の杯については、出土状況からすると類似する面もあるが、杯の内面にはまったく付着物は認められていない。このようなことからすれば、「万燈会」等の性格

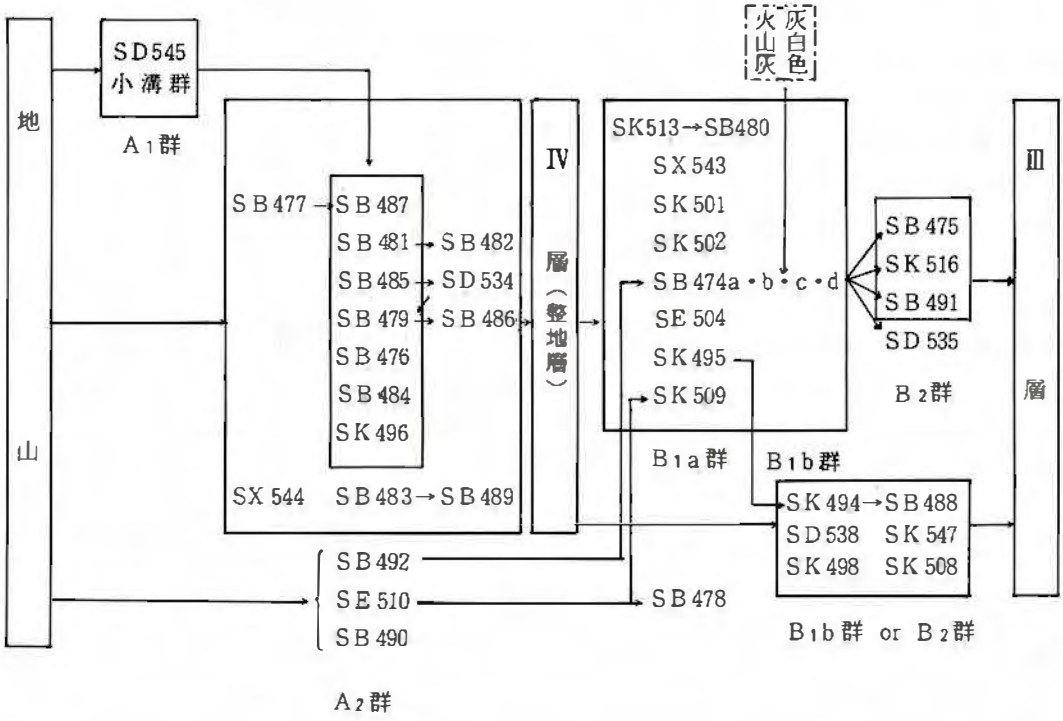
とも異なるものと思われる。本土坑を考える上では本地区検出の遺構の性格も係ってくるものと考えられる。それは、国守の館と考えられるＳＢ474四面廂付建物跡の存続期間に相当し、ここに隣接して埋納されたことである。このことは、何らかの儀式が国守の館でとり行われた後に使用した杯を一括廃棄したことを示しているのであろうか。興味深い例であり、さらに検討していきたい。

(2) 遺　　構

今回の第９次調査では古代の四面廂付建物跡をはじめとする多数の掘立柱建物跡、井戸跡、土器埋納遺構、溝跡、土坑等を検出した。ここでは遺構期の設定と年代について検討し、その後に検出遺構の性格について触れることにする。

１．遺構期の設定

本調査では、掘立柱建物跡19棟、井戸跡２基、土器埋納遺構１基、溝跡28条、土坑40基を検出した。これらの内主要なものを、検出面と基本層序、遺構相互の重複関係より整理すると次のようになる。



これらの関係より、地山面で検出されてⅣ層に覆れるＡ群、Ⅳ層上面で検出されるＢ群に大別され、Ａ群→Ｂ群への変遷が層位的に把握された。さらに、重複関係、遺構埋土の特徴からＡ群はA_1・A_2群に、Ｂ群はB_1・B_2群に細分できる。

A_1群のＳＤ545小溝群は、一部削平を受けていたが、ほぼ調査区全域に分布していた。また

A_2群のうちSB476・479・481・484・485・487・SK496は、重複関係からすべてA_1群より新しいことが判明している。これらのことから重複関係のないA_2群についても、A_1群より新しい可能性が高いといえる。

B群については、SB474が比較的長期間存続し、他の遺構と重複関係にあることから、SB474を基準としてSB474の存続時（B_1群）とそれより新しいもの（B_2群）に分けることができる。

B_1群は灰白色火山灰の有無を基準として、降下前に機能していたもの（SB474a・b、SB480、SB478、SE504、SK501、SK502、SK495、SK513、SK509、SX543）と降下後のもの（SB474c・d）とに分けられ、前者をB_1a群、後者をB_1b群とする。

B_2群はSB474と直接切り合いがあり、これより新しい遺構（SB475、SB491、SD535、SK516）が該当する。

この他にSB474と直接切り合いのない遺構（SD538、SX547、SK494、SK498、SK508）については、B_1b群もしくはB_2群に属するものと推定される。

以上の層序、重複関係の検討により、各遺構群は時間差を示すものと理解され、遺構期として設定することが可能と考えられる（第35図）。

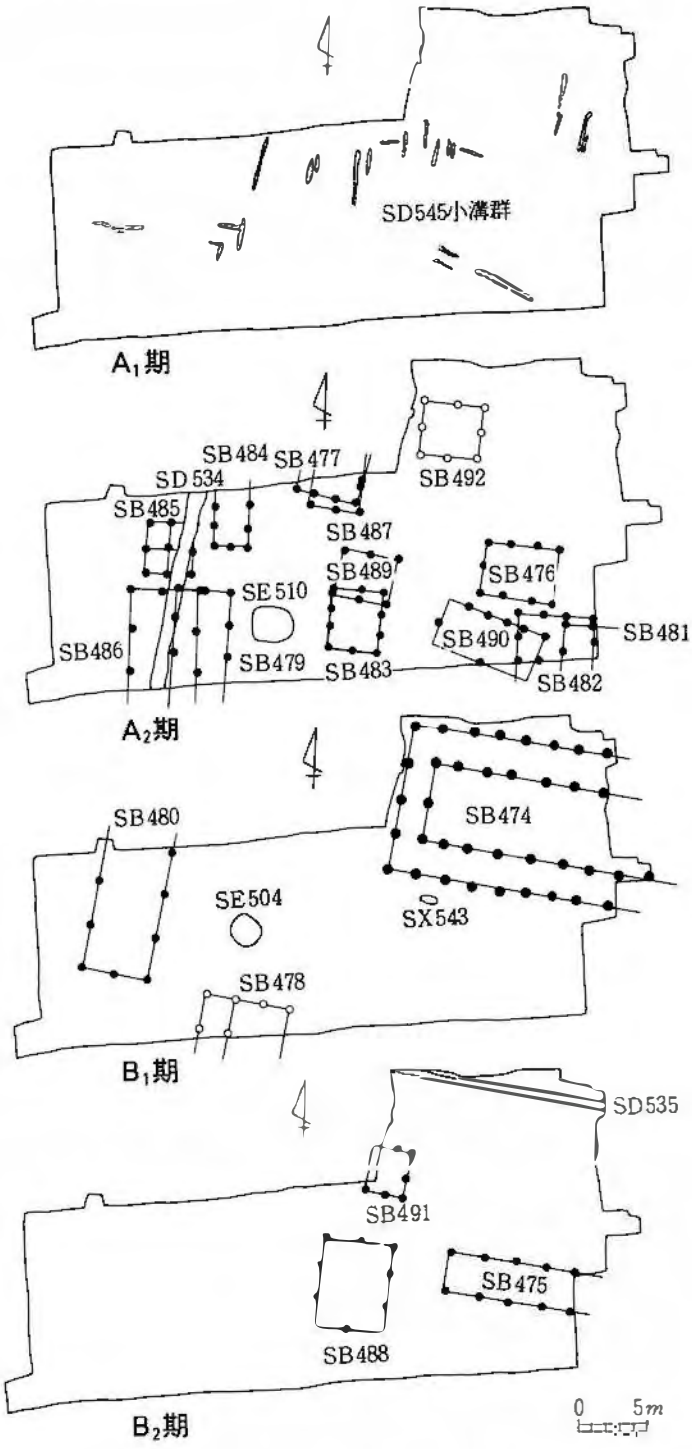
各遺構期の内容・特徴を整理すると次のようになろう。

A_1期： SD545小溝群は調査区のほぼ全域に分布し、本来的には南北と東西方向の直交する溝で構成される形態をとっていたとみられる。方向は南北溝でみるとN5°～10°E前後の傾で規則性がある。こういった小溝群は、多賀城南前面にあたる市川橋・山王遺跡などでも検出されてきており、耕作に関連するものと推察されている（註10）。

A_2期： 掘立柱建物跡、溝跡、焼土遺構がある。建物の規模は後続するC期に比べ小規模である。方向は北で東に振れるものや、発掘基準線にほぼ沿うものなどがあり規則性は認められない。このA_2期の建物には、さらにいくつかの重複関係が認められ、2～3小期に細分される。なお、SB492、SE510は地山面で検出されⅣ層との関係が不明であるが、SB492がB期のSB474に切られ、SE510もB期のSB478に切られることから、この時期とみておきたい。

B_1期： SB474の存続期間に含まれるものが該当する。SB474は前述のとおりa～dの変遷が認められている。c・d（B_1b期）の掘り方埋土には灰白色火山灰が粒状に入ることから火山灰降下後、a・b（B_1a期）は降下前の構築と考えられた。さらにbは埋土の特徴から火災によって焼失していることが知られた。他にこの時期に属する遺構としては灰白色火山灰が自然堆積するSE504、SK501、SK509があげられる。　また、B_1a期に相当するSB480とSB478は柱筋を揃えて建てられており、SB474の方位にほぼ一致している。柱

穴は他の時期に比べ規模が大きい特徴を持つ。このことから3者は計画的に配置された同時期の建物と考えられる。



第35図　主要遺構変遷図

B₂期：　SB474 廃絶以降の時期で、SB474 と直接切り合いのあるSB475、SB491、SK516、SD535が属する。柱穴の規模はC期に比べ小規模である。方向はB₁期より若干東に振れる特徴を持つ。

2．遺構期の年代

はじめにA₂期の下限年代、B₁期の上限年代を求めるために、Ⅳ層出土土器について検討しておきたい。Ⅳ層出土土器には前述のとおり、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器があり、土師器・須恵器が主体で、これに赤焼き土器が少量加わる。赤焼き土器は大型の杯のみであり、小型のもの(小皿)は認められない。土師器杯はロクロ調整で内面がヘラミガキ・黒色処理されているものである。底部の特徴には回転糸切り無調整のものと、底部周縁を再調整（回転ヘラケズリ調整、手持ちヘラケズリ調整）するものとがあり、前者が大半を占める。須恵器杯には底部の特徴から回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、底部およびその周縁を回ヘラケズリしたものがある。赤

は底部がすべて回転糸切り無調整である。また、灰釉陶器では黒笹90号窯式の椀が出土している。以上の土器群については多賀城跡のE群土器（註11）に相当するものである。E群土器の年代については10世紀前半頃とされている。

Ⅳ層と灰白色火山灰との関係については、Ⅳ層上面で検出される遺構埋土に灰白色火山灰が含まれているものもあることから、Ⅳ層出土土器は灰白色火山灰降下前のものである。

A_2期のうち掘立柱建物跡から出土した遺物はいずれも少破片で、遺物の年代を細かく検討するのが困難である。そのため同期のSE510、SK496から比較的多く出土している土師器と須恵器について検討する。土師器はロクロ調整で回転糸切りのものが多い。須恵器杯には回転糸切りのものとヘラ切りのものがある。また、赤焼き土器は出土していない。これらの特徴からA_2期の土器群は多賀城跡のD群土器に類似するものであり、9世紀後半代と考えられる。

A_1期については、A_2期より古いことから、9世紀後半以前とすることができる。

B_1期は前述のとおりⅣ層より新しく灰白色火山灰降下前後の時期である。SB474 a・bとSB474 c・dの間に灰白色火山灰が降下しており、a～dは連続的に建て替えられていることから10世紀前半代と考えられている。これは各遺構から出土した土器の組成が多賀城跡のE群土器と類似することからも裏付けられる。

B_2期ではSB475から多賀城跡のF群土器の時期に出現する小型杯（小皿）に類似するものが出土している。この小型杯が出現する年代は10世紀中頃（註12）と考えられている。したがってB_2期の年代も10世紀中頃とみておきたい。また、SB491、SK508より灰釉陶器椀が出土しており、折戸53号窯式に比定できるものである。

(3) 検出遺構の性格と意義

今回の調査において4期の遺構の変遷が把握されたが、この中で特に注目されるのはB_1期段階の遺構群である。

この期にはSB474四面廂付掘立柱建物がみられ、その西側にSB478・480掘立柱建物と井戸が配されている。いずれも整地地業（第Ⅳ層）を行った後に構築されたもので、SB 474は東西棟、他の2棟が南北棟で、建物方向を揃えていることから、これらは一定の規格に基づいて計画的に配置された建物群と考えられる。このうち、SB 474は四面に廂を持つ大規模な建物であるが、こういった四面廂付建物はこれまでの長年にわたる多賀城跡内外の調査でも数例検出されているにすぎない。すなわち、多賀城跡内では政庁正殿跡のほかには六月坂地区で2棟みられるだけであり、城外では館前遺跡のSB02建物跡が唯一の例である。いずれの場合も重要な施設の中心建物であることから考えると、この地区にも何らかの重要施設が置かれており、SB474は、その中心建物であったとみて差し支えないものと思われる。本例と同様に

城外に位置する館前遺跡の場合、四面廂付建物を中心とする6棟の建物群は国司クラスの館跡と考えられており（註13）、本地区の性格を考察する上でも注目される見解であろう。

ところで、C期の建物群の方向は当教育委員会が実施した第4・8次調査で検出しているSX382東西道路に一致し、SB474はその推定延長線の北約50mに位置している。この道路は幅が約12mあり、多賀城外郭南辺築地に平行して約5町南を東西に走るもので、当時の主要な道路と考えられるものである。したがって、これらの建物群は多賀城の南辺を基準とした地割内の一郭に整然と建てられていた可能性が高い。

次に出土遺物からみると、すでに述べたように本地区からは比較的多量の施釉陶器・中国産陶磁器が出土している。灰釉陶器・緑釉陶器が量的にこれほどまとまって出土した例は多賀城内でもまだみられない。灰釉陶器には内面に金泥が付着したものが含まれており、緑釉陶器には三足盤などの希少な器種もある。また、中国産陶磁器についても多賀城内からの出土自体がきわめて少ない遺物であるが、本地区では青磁水注、褐釉陶器水注などもみられ象徴的である。以上のように施釉陶器・中国産陶磁器の資料からみると、この地区が奢侈製品を豊富に使用していた場であったことを窺い知ることができる。また、墨書土器の中には「厨」と記されたものがあり、本地区の性格の一端を示していると考えられる。

さらに、建物群には井戸が付随しており、その中から櫛や下駄などの生活用品、斎串・人形などの祭祀具、食料残滓とみられる桃の種子等が出土したが、これらはいずれも、ここが日常生活の場でもあったことを物語る遺物であろう。

以上に述べたことを総合的に考察し、さらにこの地区が多賀城外であることを考慮すると、今回の調査地は多賀城と密接に関わる場であり、それは実務官衙地域というよりは、むしろ国司のような高級官僚の生活の場、すなわち「館」の中心部分と理解するのが妥当と考えられる。

さらに、SB474c 柱穴掘り方埋土から出土した木簡は、本建物跡の性格を示す好資料となりうるものである。本木簡の解釈については別稿の平川氏の報文のとおりである。陸奥国と右大臣との間にやりとりがあったことを示すもので、当国側でその任にあたったのは『国守』であるという。

今回の調査で発見されたSB474 四面廂付建物跡を中心とする建物跡及び井戸跡等の遺構は国司の館を構成するものと考えられることは先に詳しく述べたが、木簡の解釈によって、さらに「国守の館」である可能性が、きわめて高くなった。

これまでの30年間にわたる発掘調査によって古代の多賀城については数多くの事実が明らかにされてきたが、「国守の館」や古代末から中世にかけての「多賀国府」がどこにあったのかという2点が、未だ解明されていない大きな問題点として残されていた。今回「国守の館」跡とみられる中心部分が検出されたことは多賀城をめぐる年来の課題の一つに解決の糸口を得た

ことになる。

全国的にみて古代の「国府」が発掘調査によって解明されている例はいくつか挙げることができる。しかし、「国守の館」が発見された例は未だに皆無である。今回、陸奥国の多賀城で「国守の館」跡が発見されたことは、ひとり多賀城の解明に役立つのみならず、古代日本の国府のあり方を究明する上でも極めて大きな意義をもつものである。

〈註〉

註1　灰釉・緑釉陶器については斎藤孝正氏の御教示による。

註2　褐釉陶器、青磁・白磁については亀井明徳氏の御教示による。

註3　図示したものの他に底部破片を加えた数で積算している。

註4　図示したものの他に破片資料がある。

註5　ＳＫ161土坑（ＳＫ●1土坑）出土の土器組成については、第15回 古代城柵官衙遺跡検討会資料（1988）に示されている。これによると土師器、須恵器、赤焼き土器の比率は40%、７%、53%となっている。また、杯の法量、底部切り離し技法についても、本遺構出土土器群とほぼ同様のデータが得られている。

註6　白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」（1980）

註7　註６に同じ
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡・政庁跡本文編』（1982）
本報告書中で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、多賀城跡の須恵系土器と同様のものとみている。

註8　第15回古代城柵官衙遺跡検討会において平川南、高倉敏明、千葉孝弥の３氏により口頭発表がなされている。千葉孝弥『多賀城周辺の古代遺跡・山王遺跡』第15回古代城柵官衙遺跡検討会資料（1988）

註9　岡田茂弘・桑原滋郎『多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅰ」（1974）

註10　白鳥良一『第37次調査―多賀城跡―』宮城県多賀城跡調査研究所年報1980（1981）
赤澤靖章『山王遺跡―仙塩道跡建設関係遺跡八幡地区調査概報―』宮城県文化財調査報告書第138集（1990）

註11　註６・７に同じ

註12　〃

多賀城市山王遺跡の木簡について

国立歴史民俗博物館
平川　南

一、釈文

右大臣□
□餞馬□文
□□□臣□
餞馬大収文

長さ(五五㎜)×幅三六㎜×厚さ八㎜

二、形状

この木簡は題箋軸とよばれるものに属する。短冊形の一枚の板から削りだして題箋部と軸部を作る。この木簡は軸部が根元から欠損している。題箋部は片面は右下部と左側面、もう片面は右上部と右側面がそれぞれ抉り取られたように木簡面がほとんど失われている。材の保存状況もそれほどよいとはいいがたい。

三、内容

題箋両面の内容は全く同文と判断できる。正倉院文書中の題箋の例にも、表裏同文のものは数多くみいだせる。上記したように木簡面の傷みが甚だしいが、幸い表裏同文であることが確認できたので両面を相補って完全な釈文を付すことが可能となった。

「右大臣」は太政官の長官で左大臣につぐ重職である。「餞」は文字どおり餞別のことで、「餞」を『新撰字鏡』（わが国現存最古の字書、八九二年選述、九〇〇年増補）によれば、「馬乃鼻牟介（うまのはなむけ）」と訓んでいる。したがって、「餞馬」は餞別のための馬のことである。「収文」は通常、諸国の貢納物に対する中央の役所の受取状のこととして用いている。

全体の内容については、次の三通りの解釈が成り立ち得るであろう。

① 陸奥守に任命された者が陸奥国下向に先立って右大臣に挨拶を行い、そこで右大臣から餞別の馬を送られた。

〈参考〉『日本紀略』天元三年（九八〇）七月二十五日条

太政大臣二於職曹司一餞二出羽守源致遠赴任一有二和歌一

② 当時、陸奥国の按察使は大納言までは兼任しているが、右大臣に昇進すると、按察使の職を辞するのが常であった。そこで陸奥国守は、東北地方の最高行政官〝按察使〟が右大臣に昇進するにあたって餞別として陸奥国の最高の贈り物・馬を進上したと考えられる。もちろん、按察使は在京しているが、陸奥国を任地とする建前から一種の儀礼として右大臣への貢馬を〝餞（うまのはなむけ）〟と表現したのであろう。陸奥国守から餞別の馬が都の右大臣家に送られその収文（受取状）が陸奥国司宛に送付されたと考えられ、その一連の文書（送る際に付せられる陸奥国司解文の案文等）に題箋を付して保管していたのであろう。

③　②の場合の陸奥国において、右大臣への餞馬を国内から調達した際の受取状を保管していたものではないか。

これら三点のうち、いずれのケースが最も可能性が高いかは、以下若干の考察を加えてみよう。

収文の用例

(a)　『三代実録』元慶五年四月二八日条

先レ是。去年四月八日。大膳史生矢田部氏永。奸私作二諸司収文一。偸二取淡路国塩代米五十斛余一。自レ此奸二作備前讃岐等米収文一之事発露。出納諸司坐二此事一。下レ獄者衆。（下略）

(b)　『延喜主計式』

凡畿内諸国所レ進調銭。勘二定調帳一之日。具録二銭数一。移二送穀倉院一令レ納。其収文待二従レ官下一勘会。

(c)　『延喜主計式』

凡鋳銭司所レ進年料銭。随二所進数一。且附二綱丁一収二収文一。至二十年終一令レ進二惣帳一。勘会已訖乃与二返抄一。

(d)　『延喜主計式』

凡諸国貢調並雑物綱丁等。若失二諸司収文一有レ申レ官者。官先令二所司勘一之。即加二外題一。経レ省下レ寮。更写二前収文一。具注二其由一。允属共署。捺二寮印一与之。

まず四例すべて「収文」が諸国からの貢進物に対して中央の諸司が発する受取状の意として用いられている。たとえば、(a)は大膳史生矢田部氏永が、諸司の収文を奸作し淡路国米五十斛余を偸取したことが発覚し、追求の結果さらに備前讃岐等の収文をも奸作していたことも明らかとなり、出納諸司官がこれに坐して下獄する事件である。その点は次の例も同様であろう。

『類聚三代格』承和十年三月十五日太政官符

調庸並雑交易等物納畢之日、郡司綱領受二取諸司諸家返抄収文一付二授雑掌一、雑掌為レ請二返抄一与二寮官一共勘二会抄帳一、若寸絹撮米有二未進一者、不レ与二返抄一。

この史料からは、調庸並びに雑交易等を納めた日に郡司が諸司諸家より受け取ったのは返抄・収文であり、収文は主計寮において返抄請求のために抄帳と勘会されることが知られる。そして未進があった場合は返抄は与えられないのである。結局、収文の性格は、すでに俣野好治氏が指摘しているように現納分についての仮領収証とでもいうべきもので、未進数勘出の役割をもっていたといえる（「律令中央財政機構の特質について―保管官司と出納官司を中心に―」「史林」六十三巻六号　一九八〇年十一月）。

以上の収文の用例からは、①の場合のような右大臣家から陸奥守への餞馬の収文とは理解しがたいであろう。右大臣家から下向する新任の陸奥守に餞馬する場合、陸奥守が収文を発することは、収文の例がいずれも中央の諸司が発するものであった点からしても考えにくく、さらに陸奥国府において、題箋を付けた収文を保管してい

た状態も説明しにくいのではないだろうか。

「右大臣殿餞馬」の用例

『権記』長保二年（一〇〇〇）九月十三日条

奏文並宣旨等注二目録一。退出詣二左府（左大臣）一。下二宣旨一。帰宅。出羽守義理朝臣所レ進書状並貢馬解文等。彼息男為義持来。左大殿（左大臣殿）貢馬六疋解文在レ別。（下略）

出羽守が都の左大臣殿に貢馬した史料であるが、この「左大（臣）殿貢馬六疋解文」という表記を参照すれば、「右大臣殿餞馬」は①の右大臣殿からの餞馬の意ではなく、②③の右大臣殿に対する餞馬と解することができるであろう。ただし、③は陸奥国内からの馬の調達であるから、収文は国司の側にのこされるのは案文であるが、この題箋には○○案とはない。

以上の検討からは、②のケースが最も可能性が高いであろう。②の場合はいくつかの付帯条件を考慮しなければならないが、この場合は先に述べたようにあくまでも按察使は在京しているが、陸奥国を任地とする建前から、右大臣昇進とともに按察使を辞することは陸奥国を離れる行為とみて、〝うまのはなむけ〟という名目のもとに貢馬したと理解するのである。この陸奥国司から右大臣への餞馬はおそらく陸奥国の貢馬の一形態として慣例化し、その貢進に対して右大臣家から収文が陸奥国司に与えられたと想定することができるであろう。

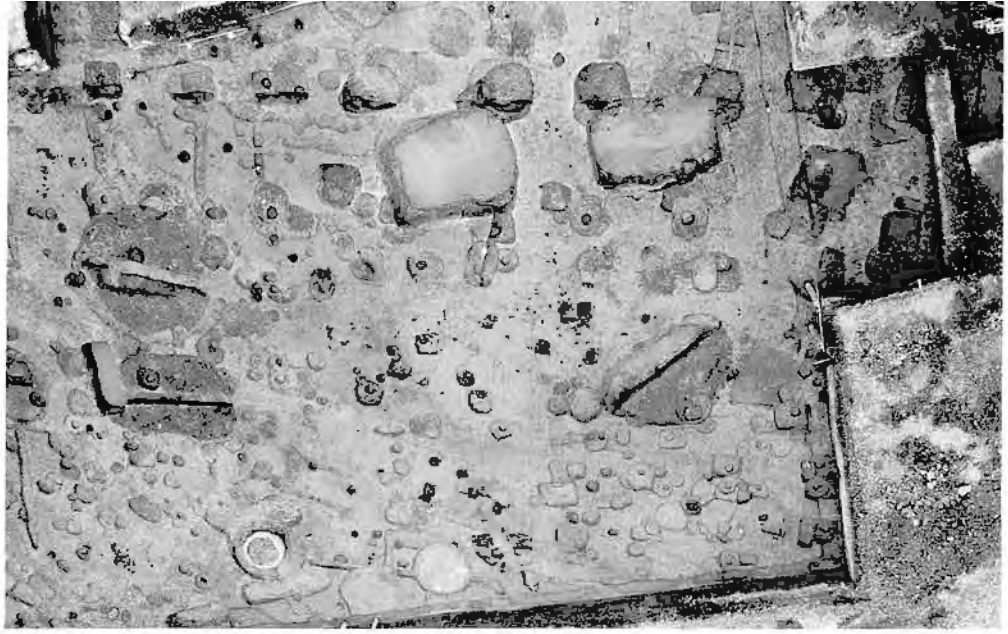
なお、参考までに大納言兼按察使として、右大臣に昇進した人物を一応九世紀末から十世紀前半までの間で『公卿補任』でみてみると、つぎのとおりである。

昌泰四年九〇一（右大臣任、以下同じ）　従三位源光
延長二年九二四　正三位藤原定方
承平三年九三三　正三位藤原仲平
天慶七年九四四　正三位藤原実頼
天暦元年九四七　従二位藤原師輔
康保四年九六七　正二位藤原師尹

本遺跡は遺構・遺物などの考古学的検討からも国司の館と想定する有力な根拠となるし、さらに国守の館であるという可能性も提示できるきわめて重要な資料であるといえよう。また、本遺跡の年代は十世紀前半とされている。この時期は、律令体制の衰退とともに地方政治が大きく変質を遂げるのである。地方政治の中心となる国府においても、しだいに国司の館の役割がその重要性を増してくる時期でもある。（鬼頭清明「国司の館について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第十集　一九八六年）。

調査区全景（東より）

写真図版１　　ＳＢ474 掘立柱建物跡（南東より）

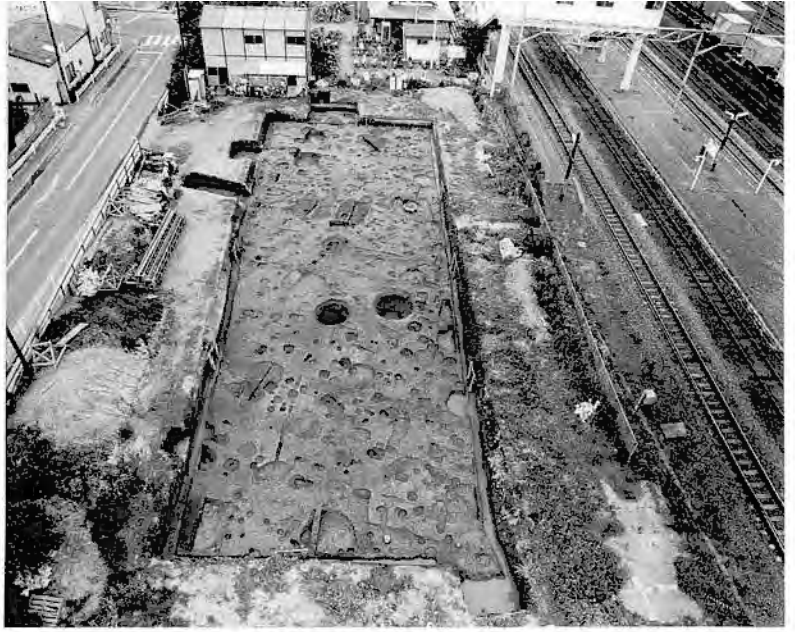


調査区東半部全景
（真上より）

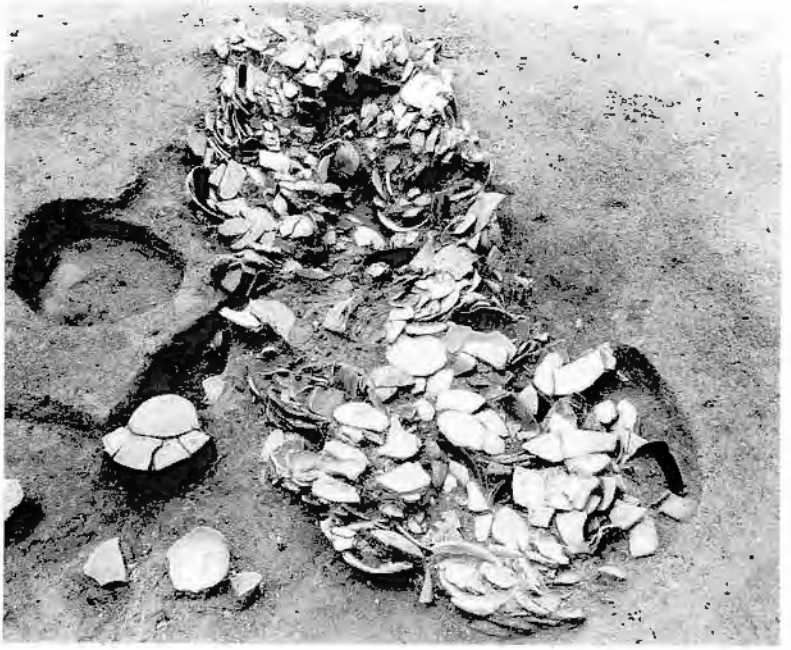
SB480 掘立柱建物跡
（西より）

SB483 掘立柱建物跡
（南より）

写真図版 2



調査区全景（西より）

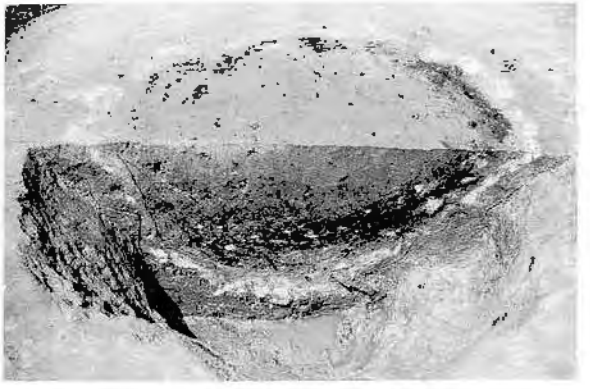


ＳＸ543土器埋納遺構
（東より）

同上
上部破片を取り除いた状況

写真図版３

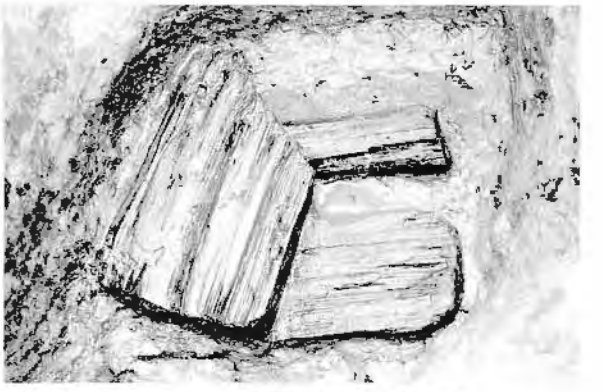
SE504 井　戸　跡（南より）



SE504 井戸内埋土堆積状況

SB474 柱穴半載状況

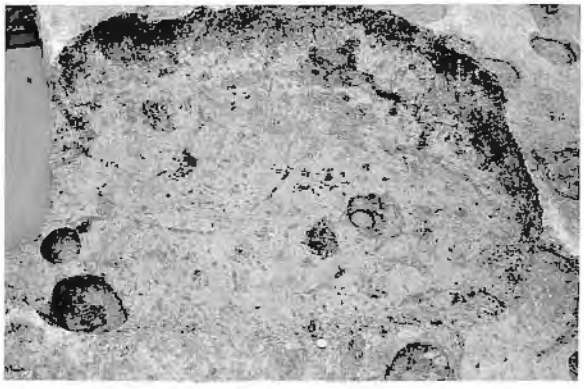
SB474 柱穴掘り方完掘状況



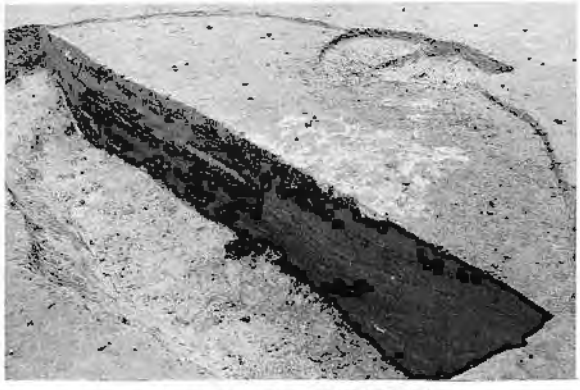
SB474 柱穴礎板検出状況

写真図版 4

SK 494

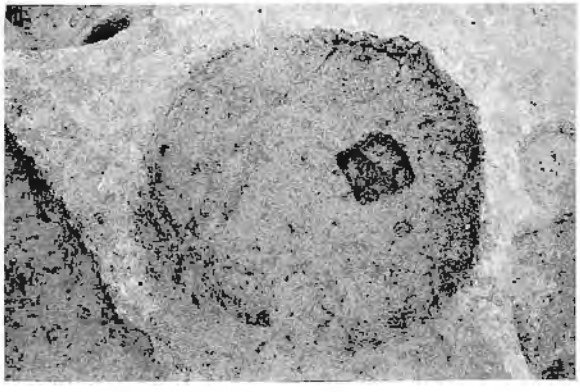


SK 495



SK 501 土層堆積状況

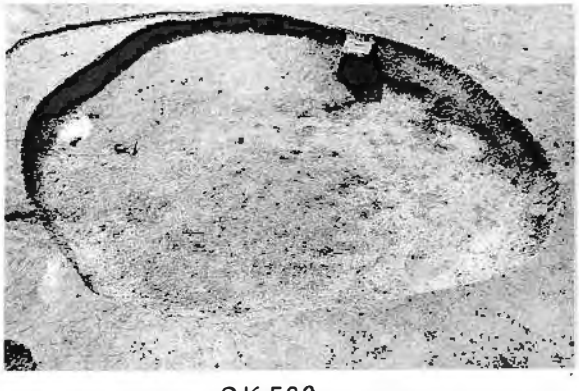
SK 501



SK 503

SK 505

SK 508



SK 509

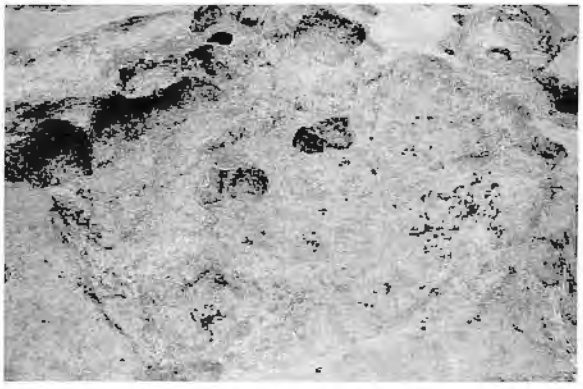
写真図版 5

SK511

SK551 遺物出土状況

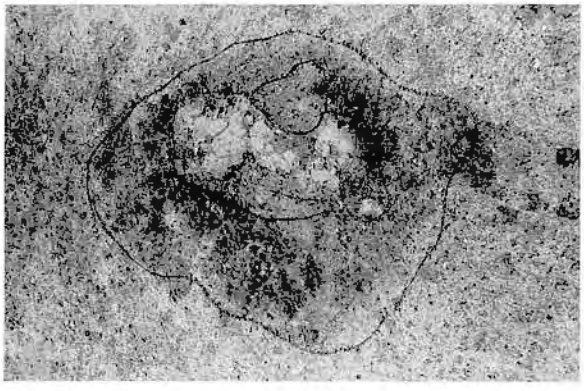
SK513

SK515



SK516

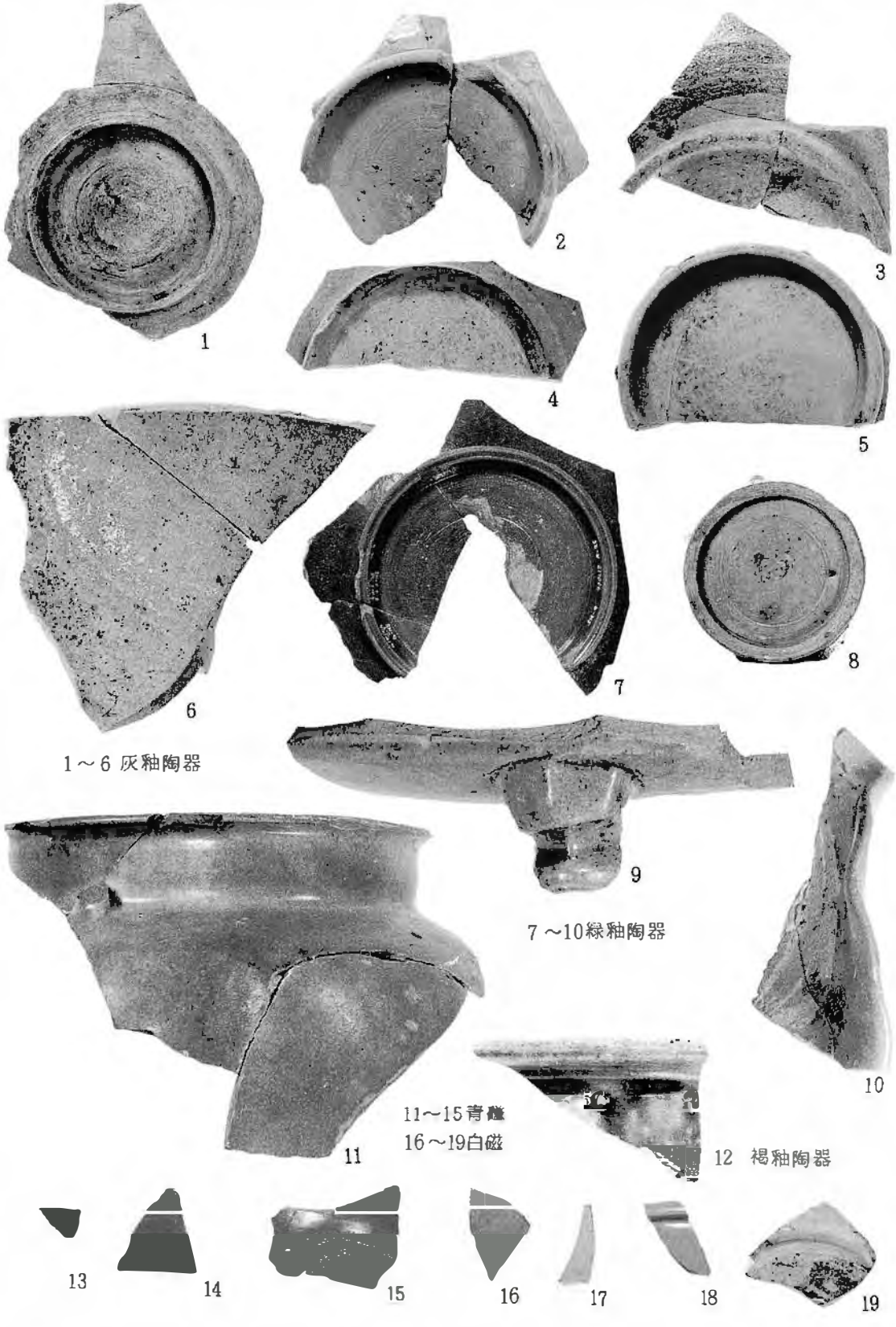
SK517



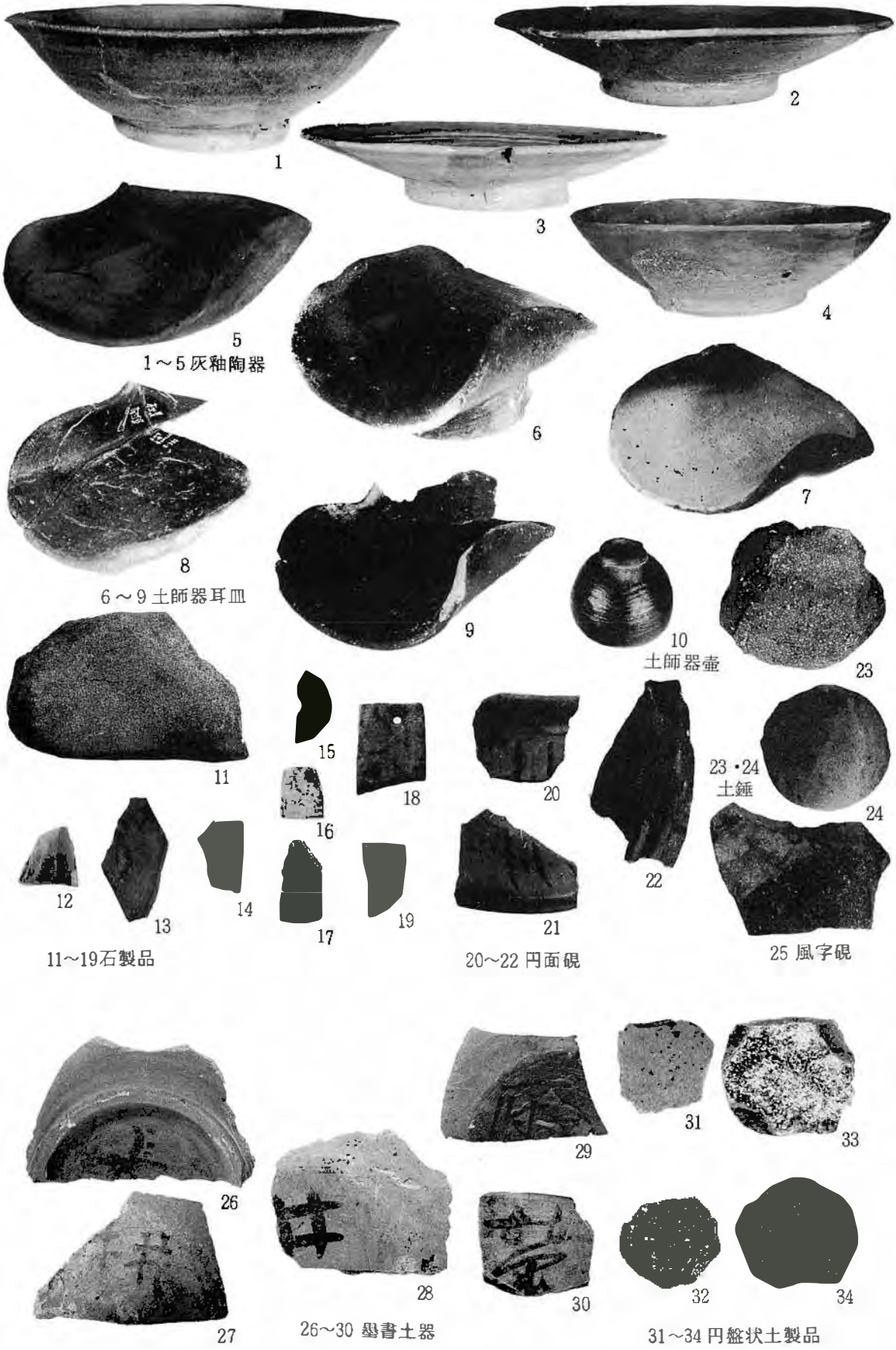
SX544

Pit 298 赤焼き土器杯出土状況

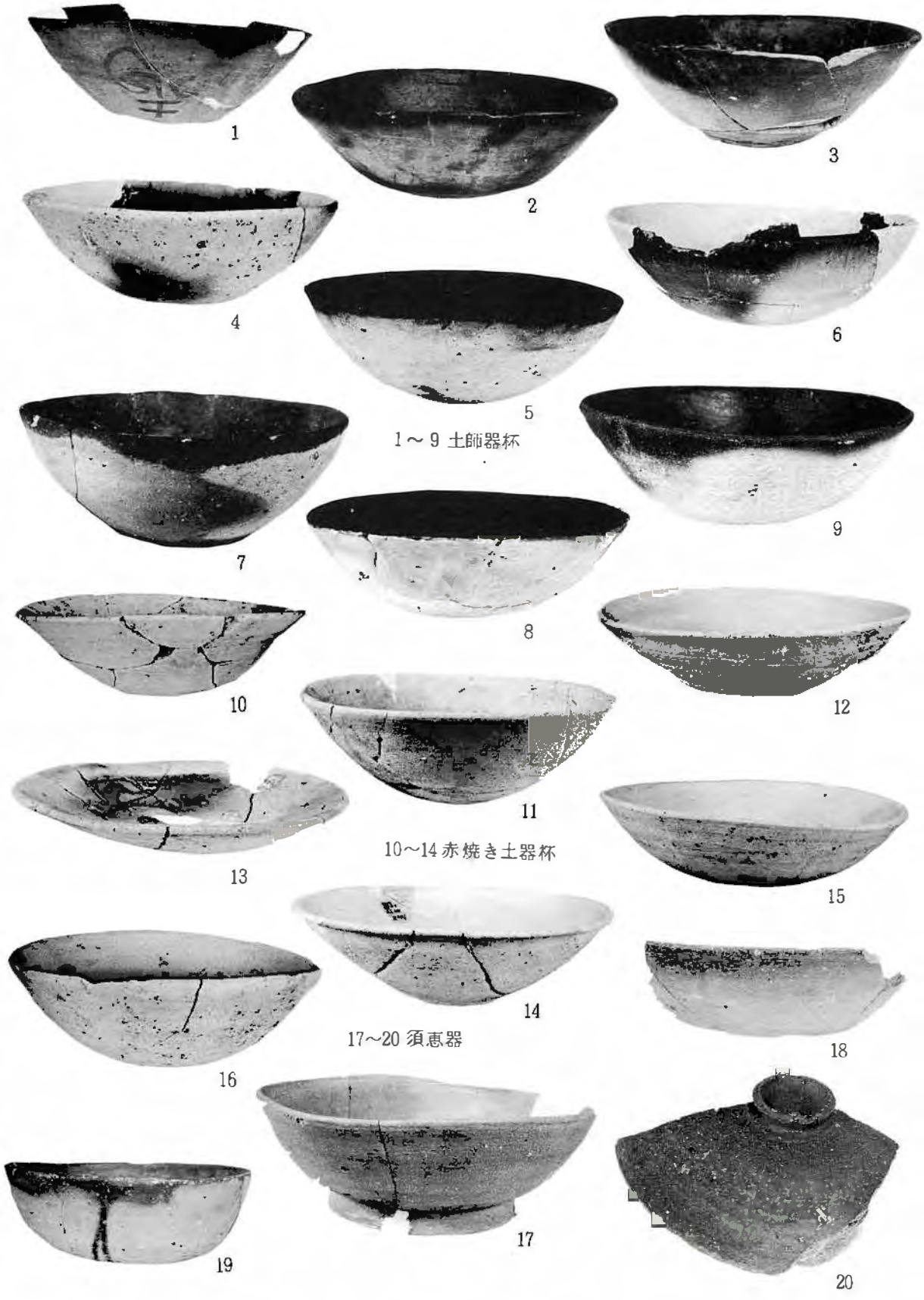
写真図版 6



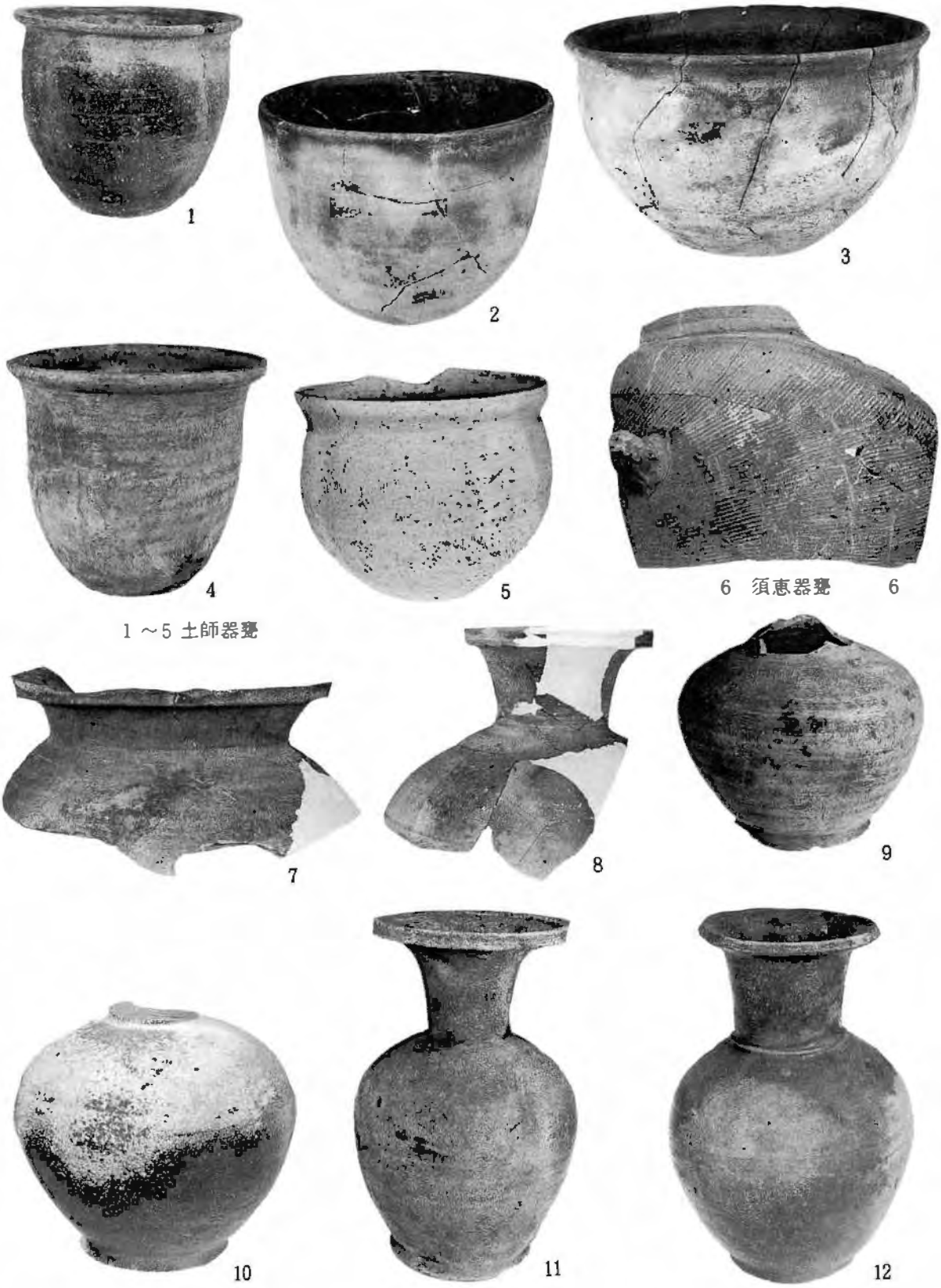
写真図版 7　　緑釉・灰釉陶器・中国産陶磁器



写真図版 8　灰釉陶器・土師器耳皿・円面硯・土錘・石製品・墨書土器



写真図版 9　　土師器・赤焼き土器・須恵器



6　須恵器甕　6

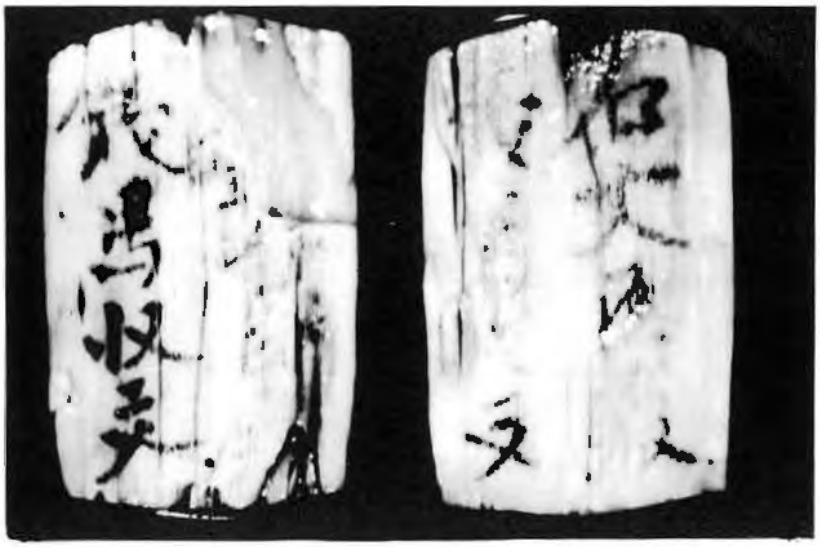
1～5 土師器甕

7～12 須恵器瓶

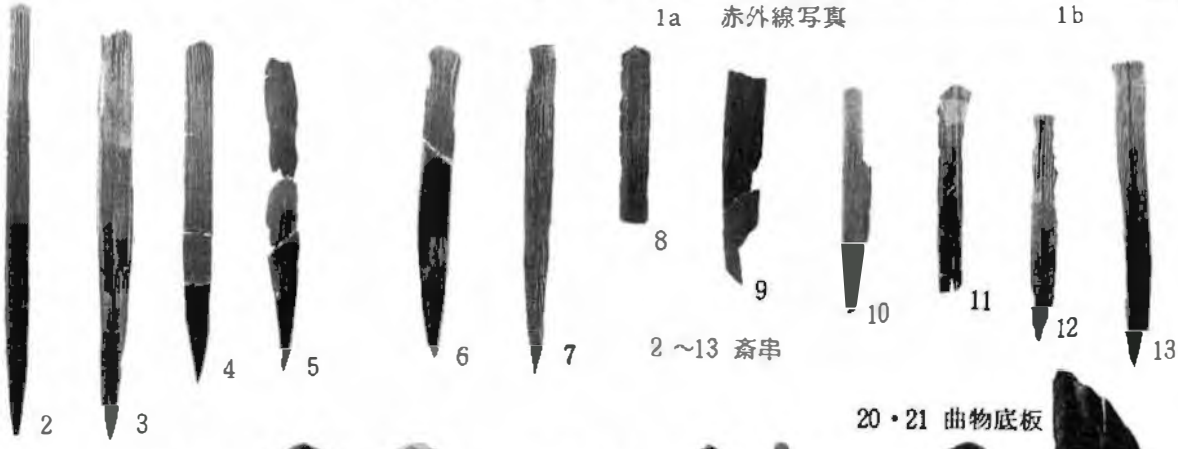
写真図版10　　土師器甕・須恵器甕・瓶

1a　1b

1a・b　木簡



1a　赤外線写真　1b

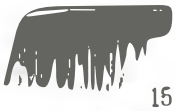


2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12　13

2～13　斎串

20・21　曲物底板

14



15

14・15　横櫛

16a　16b

16a・b　立体人形

17

17　筒状製品

18　19

18・19　弓

20

21

22a

22 b

22a・b　下駄

23

23　錘

24

25

24・25　井戸側

写真図版11　　木　製　品

1・2・6～8・29～31　刀子　　3　鉄鏃　4　鉄斧　5　鐔　9　鋤先
10～18・24・25・27　釘　　21　鎌　　19・20・22・23・26　不明

写真図版12　　**鉄　製　品**

多賀城市文化財調査報告書第26集

山　王　遺　跡

—第9次発掘調査報告書—

平成3年3月31日 発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電　話（022）368－0134

印刷　渡　辺　印　刷
塩釜市旭町17番13号
電　話（022）364－3161